現代文問題集 第三冊

根拠から答案を組み立てる

標準・記述の組み立て

改訂完成版

和会塾

目次・全六章の見取り図

各章の本文・設問・解答・解説は一続きです。章題の末尾に、その章の開始頁を示します。

第一章　記録と記憶のあいだ　5 ― 定義・対比・基本的な因果 ― 40〜80字

第二章　土管の奥へ　16 ― 行動・描写・反復・二場面 ― 60〜90字

第三章　列が止まって見えるとき　28 ― 二つの説明・原因と条件 ― 50〜90字

第四章　光の遅さについて　40 ― 科学的事実・比喩・限界 ― 60〜100字

第五章　静かな場所に声を置く　53 ― 複数立場・譲歩・条件 ― 70〜110字

第六章　わからない部分を残す　68 ― 離れた根拠・境界・全体統合 ― 80〜120字

この冊子で学ぶこと

この冊子で身につける力　根拠を見つけて終わらず、必要要素へ分け、関係と限定を定め、自分の答案として組み直す。

第三冊は、第二冊より長い答案を書くことだけを目標にしません。同じ40〜120字の中で、問い、根拠、必要要素、関係、言い換え、点検を自分で説明できる状態を目指します。

一　問題編　本文を読み、設問直後の準備欄で根拠と関係を整理し、升目へ清書します。第一・第二章では欄を明示し、第三・第四章では根拠と関係のメモへ絞り、第五・第六章では自由メモだけにします。

二　解答編　解答編では全章・全問について、設問の意図、根拠、必要要素、組み立て方、三つの完成答案、自己採点、注意点を示します。表現が異なっても、同じ要素と関係を満たす答案が成立することを確かめます。

三　書き直し　模範解答を写す前に、自分の答案へ丸や線を付けて不足を確認します。次に別解例と比べ、語順だけをまねるのでなく、どの要素をどの関係で置き直したかを説明してから書き直します。

答案を組み立てる六つの工程

一　問いを確かめる　誰・何について、理由、内容、違い、変化、働き、意義、主張のどれを答えるか確認する。

二　根拠を選ぶ　問いに必要な本文箇所を選び、具体例を残すか、外すかを決める。

三　要素に分ける　答案に欠かせない内容を二〜三個の意味のまとまりへ分ける。

四　関係を定める　対比、因果、変化、具体と抽象、条件、譲歩・限定のどれでつなぐか決める。

五　文に組み立てる　本文の意味を保ち、主語、述語、語順、接続を整えて一文または二文にする。

六　点検して直す　内容、関係、限定、表現、字数を確認し、不足と言いすぎを直す。

「自分の言葉」とは、本文から離れて感想を書くことではありません。本文の意味を保ち、問いに合わせて根拠の順序とつなぎ方を整えることです。

第一章　記録と記憶のあいだ

この章で身につける力　二つの概念を共通の観点で比べ、根拠を必要要素に分け、対比・因果・限定を用いて40〜80字の答案へ組み立てる。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

① 朝、家を出ようとしたとき、スマートフォンが「提出物」と知らせる。初めて行く場所へは地図アプリが導き、気になった言葉はその場で検索できる。写真やメッセージも、端末の中だけでなく、ネットワーク上の保存場所へ残しておける。私たちは今、自分の頭の中だけで覚えるのではなく、道具と役割を分けながら生活している。

② ここで、記録と記憶を区別しておきたい。記録とは、文字、音声、画像などの形で、出来事の痕跡を外部に残したものである。保存した時点の内容を比較的正確に再現でき、本人以外とも共有できる。一方、記憶は、過去の出来事が現在の自分の中に残り、思い出される働きである。同じ出来事でも、あとから得た知識や今の関心によって受け取り方が変わることがある。

③ 記録が正確なら、記憶より優れているとすぐに決められるわけではない。写真は、レンズを向けた範囲を細かく残せるが、その場のすべてを写すものではない。反対に記憶は、日付や言葉を取り違えることがあっても、ある出来事が自分にとってどのような意味を持ったかを、別の経験と結びつけて保つことがある。両者は、同じ仕事を精度の違いで行うものではなく、異なる働きを担っている。

④ 情報を外へ預けること自体は、デジタル機器とともに始まったのではない。人は昔から、約束を手帳に書き、計算の途中を紙に残し、本棚のどこに何があるかを覚えてきた。外部の道具へ一部を任せれば、頭の中の負担を減らし、別のことへ注意を向けられる。ある実験では、一つ目の情報を確実に保存できると考えた人は、保存せずに学んだ人より、そのあとに示された新しい情報をよく覚えていた。保存が、新しく学ぶ余地を生む場合があるのである。

⑤　ただし、外へ任せると、何を覚えるかが変わることもある。別の実験では、あとで情報を利用できると予想した人は、情報の内容そのものより、それがどの保存場所にあるかをよく覚える傾向を示した。ここから直ちに「検索は記憶力を衰えさせる」とは言えない。内容を覚える代わりに、必要な情報へ至る道筋を覚えたと見ることもできるからだ。変わったのは記憶の量だけでなく、記憶を向ける対象かもしれない。

⑥　写真についての実験も、単純な結論を許さない。美術館の展示物をそのまま観察した場合と、全体を写真に撮った場合を比べると、後者では展示物や細部の記憶が弱くなる結果が得られた。しかし、展示物の一部を拡大して撮った場合には、同じ低下は見られなかった。写真を撮るという一つの行為でも、対象へどのように注意を向けたかによって結果は変わる。道具を使ったかどうかだけでは、人が何を覚えるかは決まらないのである。

⑦　さらに、写真は撮った瞬間だけで役割を終えるものでもない。後日それを見直し、なぜ撮ったのかを書き添え、誰かと当時のことを話せば、写真は思い出すための手がかりになる。ただ大量に保存して一度も見返さなければ、必要な一枚を見つけられないこともある。残すことと、残したものに再び関わることとは別である。記録は記憶を自動的に作るのではなく、記憶に働きかける機会を用意する。

⑧　この違いは、記録を事実そのものと取り違えないためにも大切である。たとえば短いメッセージだけが残っているとき、その前にどのような会話があり、どのような調子で書かれたかまでは分からないことがある。記録には確かめられる強みがある一方、切り取られた範囲と文脈の外側がある。記憶にも、思い違いや変化がある。どちらか一方だけで過去の全体を所有できるわけではない。

⑨　では、私たちは何を道具へ任せ、何を自分で覚えるべきなのだろう。すべての予定や道順を暗記する必要はない。記録の正確さや検索の速さに助けられれば、考えるための時間を確保できる。しかし、保存しただけで理解したことにはならない。学ぶときには、どの内容に注意を向け、すでに知っていることとどう結びつけるかを、自分で引き受ける必要がある。

⑩　したがって、記録と記憶を敵どうしのように考えるべきではない。記録は、正確さ、共有、思い出す手がかりを与える。記憶は、経験を現在の関心と結びつけ、意味のあるものとして受け取り直す。技術を使うたびに記憶が衰えるとも、記録が多ければ多いほど豊かになるとも限らない。大切なのは、何を外へ預けたのかを知り、そこで生まれた余地を何へ向けるかである。記録と記憶のあいだに、自分なりの分担を作ることが求められている。

本文中の研究紹介は、Sparrow・Liu・Wegner（2011）、Storm・Stone（2015）、Henkel（2014）の実験研究を、示された条件が分かるよう学習用に要約したものです。出典は巻末の「本文資料」に示します。

答案を組み立てる準備

完成文を先に考えず、次の順に短くメモします。本文の言葉をそのまま並べるのではなく、問いに合わせて主語と語順を整えてから解答欄へ書きます。

一　問いを確かめる　誰・何について、どのような関係を説明するのかを確認する。

二　根拠を選ぶ　指定された段落と、その前後から必要な箇所を選ぶ。

三　要素に分ける　完成答案に欠かせない内容を、二つまたは三つの短いメモにする。

四　関係を定める　対比・因果・変化・限定のどれで要素をつなぐかを決める。

五　文にして点検する　主語と述語、本文の限定、指定字数を確かめて清書する。

設問

問一　定義と対比（40字以内）

第二・第三段落を踏まえ、「記録」と「記憶」の働きの違いを40字以内で説明せよ。

準備メモ　問われていること：二つの働きの違い／根拠：第二・第三段落／必要要素：「記録」「記憶」／つなぎ方：「一方」で対比する。

解答欄（40字）

問二　理由と条件（50字以内）

第四段落によれば、情報を外部に保存することが、新しい情報の記憶に役立つ場合があるのはなぜか。実験の条件を含め、50字以内で説明せよ。

準備メモ　問われていること：役立つ理由／根拠：第四段落／必要要素：保存の条件・生じた余地／つなぎ方：「～ため、～から」で因果を示す。

解答欄（50字）

問三　結果の解釈（55字以内）

第五段落の実験について、筆者は、外部に保存された情報を利用できると予想すると「記憶を向ける対象」がどのように変わり得ると考えているか。55字以内で説明せよ。

準備メモ　問われていること：何から何へ変わるか／根拠：第五段落／必要要素：内容・保存場所／つなぎ方：「～より～へ」で変化を示す。

解答欄（55字）

問四　事実と限定（65字以内）

第六段落の実験から、写真を撮ると記憶が弱まるとは一律に言えないのはなぜか。二つの撮り方の違いに触れ、65字以内で説明せよ。

準備メモ　問われていること：一律に言えない理由／根拠：第六段落／必要要素：全体撮影・一部を拡大した撮影／つなぎ方：「～が、～」で結果を限定する。

解答欄（65字）

問五　本文全体の結論（80字以内）

筆者は、記録と記憶をどのように関係づけて用いるべきだと考えているか。技術の利点と、利用者が担うことの両方に触れ、80字以内で説明せよ。

準備メモ　問われていること：両者の関係と使い方／根拠：第七・第九・第十段落／必要要素：記録の利点・人が担うこと・結論／つなぎ方：「〜一方、〜」で分担を示す。

解答欄（80字）

解答・解説

本文の流れ

第一～第三段落　日常の道具から問いを起こし、記録と記憶の違いを、正確さと意味づけの働きから整理する。

第四～第六段落　保存、検索、写真についての実験を示し、技術の影響は条件や注意の向け方によって変わると説明する。

第七・第八段落　記録を見直す働きと、記録にも記憶にも限界があることを述べる。

第九・第十段落　記録へ任せる働きと人が担う働きを分け、両者に自分なりの分担を作ることを結論とする。

問一　定義と対比（40字以内）

設問の意図　記録と記憶を同じ観点から比べ、二つの働きを一文の対比として示す。

根拠　第二段落の「出来事の痕跡を外部に残したもの」と「過去の出来事が現在の自分の中に残り、思い出される働き」、第三段落の「異なる働きを担っている」。

必要要素　①記録は出来事の痕跡を外部に残し、再現・共有する。②記憶は経験を自分の中に残し、意味と結びつけて思い出す。

組み立て方　主語を「記録」「記憶」にそろえ、「～のに対し、～」で二つの働きを対にする。

模範解答　記録が情報を外部に保存する一方、記憶は経験を今の自分の中で意味づける働きである。（40字）

別解例①　記録は共有できる形で残すが、記憶は過去の経験を今の関心と結びつける働きである。（39字）

別解例②　記録は情報を外部に残すが、記憶は経験を現在の自分の中で意味づける働きである。（38字）

☆自己採点の観点

□　記録と記憶の両方を、同じ文の中で説明したか。

□　外部に残す働きと、自分の中で意味と結びつける働きを対比したか。

□　本文の表現を並べるだけでなく、40字以内の一文に組み直したか。

答案で注意したい点　「記録は正確で、記憶は不正確」とするだけでは、第三段落が示す異なる働きの内容を説明できない。

問二　理由と条件（50字以内）

設問の意図　実験結果をそのまま繰り返さず、どの条件のもとで、なぜ新しい情報を覚えやすくなったかを因果で説明する。

根拠　第四段落の「一つ目の情報を確実に保存できると考えた人」と「頭の中の負担を減らし、別のことへ注意を向けられる」。

必要要素　①保存が確実だと考えられる。②覚えておく負担が減る。③新しい情報へ注意を向けられる。

組み立て方　条件を先に置き、「～ため、～から」で負担の軽減と新しい記憶をつなぐ。

模範解答　保存が確実だと考えられると、前の情報を覚えておく負担が減り、新しい情報へ注意を向けられるから。（47字）

別解例①　先の情報を確実に保存できれば、それを保つための負担が軽くなり、次の情報を学ぶ余地が生まれるから。（48字）

別解例②　外部の保存先を信頼できる場合、先の内容を覚え続ける負担を減らし、次の学習へ注意を回せるから。（46字）

☆自己採点の観点

□　保存できると本人が考えたという条件を含めたか。

□　負担が減ることと、新しい情報へ注意を向けられることを因果でつないだか。

□　実験の人数や手順ではなく、結果を生んだ関係を50字以内で説明したか。

答案で注意したい点　「保存すれば新しい情報を覚えられる」と断定すると、保存が確実だと考えられた場合という条件が落ちる。

問三　結果の解釈（55字以内）

設問の意図　実験から直接示された傾向と筆者の解釈を区別しつつ、記憶の対象の変化を説明する。

根拠　第五段落の「情報の内容そのものより、それがどの保存場所にあるかをよく覚える傾向」と「記憶を向ける対象かもしれない」。

必要要素　①情報の内容そのもの。②情報へ至る保存場所・道筋。③前者より後者へ対象が移る可能性。

組み立て方　「記憶力が低下する」ではなく、「内容より、取り出す場所へ」と比較・変化を一文で示す。

模範解答　情報の内容そのものよりも、あとで必要な情報を取り出せる保存場所や、そこへ至る道筋を覚えるようになること。（52字）

別解例①　利用できると分かった情報の中身より、それがどこに保存され、どうすれば再び得られるかへ記憶を向けること。（51字）

別解例②　情報自体を詳しく覚えることから、必要なときにその情報へたどり着ける場所や方法を覚えることへ移ること。（50字）

☆自己採点の観点

□「内容」と「保存場所・道筋」の両方を含め、何から何への変化かを示したか。

□ 人の記憶力全体が衰えると、本文以上に広げなかったか。

□ 実験結果を「必ず」ではなく、変わり得る傾向として55字以内でまとめたか。

答案で注意したい点　「保存場所を覚えること」だけでは、以前は何へ記憶を向けていたかという変化の出発点が見えない。

問四　事実と限定（65字以内）

設問の意図　二つの実験条件と結果を対にし、道具の影響を一律に決められない理由を説明する。

根拠　第六段落の「全体を写真に撮った場合」には記憶が弱くなったことと、「一部を拡大して撮った場合には、同じ低下は見られなかった」こと。

必要要素　①全体を撮った場合は記憶が弱まった。②一部へ注意を向けた撮影では同じ低下がなかった。③撮り方・注意で結果が変わる。

組み立て方　二つの結果を「～が、～」で対比し、「ため」で一律に言えない理由へつなぐ。

模範解答　展示物全体を撮ると記憶が弱まったが、一部へ注意を向けて拡大した場合には同じ低下がなく、撮り方で結果が変わったから。（57字）

別解例①　全体をそのまま撮影した人の記憶は弱まった一方、細部に注目して撮った人には同じ低下が見られず、条件で差が生じたから。（57字）

別解例②　展示物を丸ごと撮る場合と、細部へ注意を集中して撮る場合とで記憶への影響が異なり、撮影だけを原因にできないから。（55字）

☆自己採点の観点

□　二つの撮り方と、それぞれの結果を対応させたか。

□　「写真は記憶に悪い」または「写真は記憶を助ける」と一方だけへ広げなかったか。

□　撮り方や注意の向け方という条件を、65字以内の因果にしたか。

答案で注意したい点　一つ目の結果だけを根拠にすると、設問が求める「一律に言えない」理由にならない。異なる条件を対にする。

問五　本文全体の結論（80字以内）

設問の意図　記録か記憶の一方を選ぶのではなく、技術へ任せる働きと、人が引き受ける働きを分担としてまとめる。

根拠　第七段落の「記憶に働きかける機会」、第九段落の「どの内容に注意を向け」、第十段落の「自分なりの分担」。

必要要素　①記録の正確さ・共有・手がかりを利用する。②保存だけで理解したと思わず、注意・結びつけ・意味づけを人が担う。③両者を補い合わせる。

組み立て方　「記録には～を任せる一方、人は～を担い、両者を～」と並べ、利点・人の役割・結論の順に置く。

模範解答　記録には正確な保存や共有を任せる一方、何に注意を向け、経験をどう意味づけるかは自分で担い、両者を補い合わせる分担を作るべきだと考える。（67字）

別解例①　技術の保存性や検索の速さを生かしつつ、残しただけで理解したと思わず、情報を既知の内容と結びつける役割を人が担うべきだと述べている。（65字）

別解例②　記録を正確さや思い出す手がかりとして利用しながら、注意の向け先と意味づけは人が引き受け、記録と記憶を役割分担させるべきだと考える。（65字）

☆自己採点の観点

□　記録の利点を一つ以上示し、技術そのものを否定しなかったか。

□　注意を向けること、既知の内容と結びつけること、意味づけることのいずれかを、人が担う働きとして書いたか。

□　記録と記憶を対立させず、分担・補完という結論を80字以内で示したか。

答案で注意したい点　「記録も記憶も大切だ」とするだけでは、何を記録へ任せ、何を人が担うかという本文の結論が伝わらない。

第一章の学び　根拠を二つの要素へ分け、その関係を決めると、本文の言葉を並べるだけでなく、問いに直接答える一文へ組み直せる。

本文資料

研究結果を本文の一般的な結論へ広げすぎないよう、実験条件と結果を確認したうえで学習用に要約しています。

Sparrow, B., Liu, J., & Wegner, D. M. (2011). 『Google Effects on Memory: Cognitive Consequences of Having Information at Our Fingertips.』 Science, 333(6043), 776–778. DOI: 10.1126/science.1207745

Storm, B. C., & Stone, S. M. (2015). 『Saving-Enhanced Memory: The Benefits of Saving on the Learning and Remembering of New Information.』 Psychological Science, 26(2), 182–188. DOI: 10.1177/0956797614559285

Henkel, L. A. (2014). 『Point-and-Shoot Memories: The Influence of Taking Photos on Memory for a Museum Tour.』 Psychological Science, 25(2), 396–402. DOI: 10.1177/0956797613504438

第二章　土管の奥へ

この章で身につける力　人物の行動と描写を場面ごとに確かめ、反復する物や言葉、離れた二場面の関係から、60〜90字の答案を組み立てる。

市立暮らし資料館の一階には、大人がかがめば入れるほど太い、焼き物の土管が展示されていた。二つの口は木の台に固定され、実際の排水設備にはつながっていない。外から測れば、端から端まで二メートルしかなかった。

ところが、毎月最後の金曜日、閉館後に内側の青い輪が光ると、土管の奥行きは物差しでは測れなくなる。その夜だけ、町で手放された物や、言いかけて引っ込められた言葉が、土管の奥へ集まるのだという。入口の札には、規則が三つ記されていた。中へ入るのは二人一組。青い案内綱を腰につけ、入口には一人が残ること。三度目の鐘が鳴る前に戻ること。資料館の職員たちは、これを冗談ではなく、少し変わった収蔵の決まりとして守っていた。

その金曜日、実習員の澪と航は、青い輪がともるのを金子館長と待っていた。二人が土管へ入るのは初めてだった。金子館長は案内綱の端を確かめ、二人に言った。

「奥から持ち帰れるのは、一つだけだ。何を戻すかは、二人で決めなさい」

「二人で」という言葉に、澪はポケットの上から指を当てた。そこには、午後の仕分けで使った青いカードが一枚、二つ折りのまま入っていた。

その日の午後まで、資料館では「町の音を集める」という展示を開いていた。来館者は、覚えている音と、その音にまつわる一文を青いカードへ書いた。閉店した自転車店のベル、雨の日のバス停、朝のパン屋の戸が開く音。展示を終えたカードは画像にして保存し、傷みのある原紙は整理する予定だった。

航が「全部は残せないものもあるよ」と言ったとき、澪には「紙はもう要らない」と言われたように聞こえた。筆圧でへこんだ線や、消して書き直した跡は、画像だけでは残らない。そう説明する前に、澪は青いカードを折り、口を閉ざした。

「じゃあ、もう相談しなくていい」

航は何か言いかけたが、結局、仕分け箱のふたを閉めた。それから二人は、必要なことしか話していなかった。

*

青い輪が灯ると、土管の内側に、夜明け前の空のような色が走った。澪と航は腰の綱を確かめ、金子館長を入口に残して、並んで中へ入った。

一歩進むと、背後にあるはずの展示室の光が針の先ほどに縮んだ。外側は二メートルなのに、足元の青い綱は、乾いた土の上を遠くまで延びている。ここが現実の地下ではないことを、澪はようやく体で理解した。

壁ぎわには、片方だけの手袋、欠けたボタン、色の抜けた切符が、流れ着いた木の葉のように重なっていた。水はない。それでも物の表面には、長いあいだ水底にあったような、鈍い光がまとわりついていた。

澪が切符を拾うと、改札ばさみの乾いた音と、誰かの「先に行って」が短く響いた。行き先の文字は消えていたが、角だけは何度も指で折られたらしく、白く柔らかくなっていた。澪はその角をなぞり、元の場所へ戻した。

航が、小さな自転車のベルに触れた。ちりん、と一度鳴ったあと、子どもの声がした。

「待って」

声は土管の丸い壁を走り、少しずつ遠ざかった。返事も足音も聞こえない。航はベルから手を離した。

二人が進むにつれ、紙片が増えた。買い物のメモ、宛名のない封筒、途中で破られた手紙。書かれているのは、長い文章ではなかった。「またね」の「また」だけ、「あとで話す」の「あとで」だけ。残った言葉はどれも続きの方へ口を開けたまま、薄い紙の上で止まっていた。

紙の間には、鉛筆で何度も書き直された「ありがとう」もあった。最後の一画だけが濃く、書いた人がそこで長く手を止めたように、紙がわずかにへこんでいた。

一度目の鐘が鳴った。低い音が、足の裏から上がってきた。

やがて青い綱は、広い空洞へ入った。中央には、紙片が浅い皿のように積もっている。その向こうの壁を、濡れた文字がゆっくり流れていた。

——もう相談しなくていい。

澪は息を止めた。自分の声なのに、土管の中で聞くと、思っていたより硬かった。壁の文字を手袋でこすると、消える代わりに、青い染みが指先へ移った。

「捨てたつもりじゃなかった」

「でも、僕には、ここで話は終わりだって聞こえた」

航は、紙片の皿を見たまま言った。

「『全部は残せない』のあとに、何を残すか一緒に決めたい、って続けるつもりだった。言う前にやめた」

「言わなかった続きは、こっちには聞こえないよ」

航がうなずいた。澪も、青くなった指先を見た。消そうとしてこすった言葉は、場所を変えただけだった。

二度目の鐘が鳴った。紙片の皿の端で、何かが小さく起き上がった。青いカードだった。真ん中に深い折り目があり、片面には、にじんだ字で「もう相談しなくていい」と書かれている。午後、澪が折ったカードと同じ色だった。彼女がポケットを探ると、そこは空になっていた。

澪と航は同時に手を伸ばし、互いの指がカードの上で触れた。どちらも手を引かなかった。

「これを戻そう」

澪が言うと、航はもう一度うなずいた。

*

二人が土管の口をくぐって展示室へ戻ると、背後で三度目の鐘が鳴った。金子館長が綱を外す。窓の外は、いつの間にか朝の色になっていた。

通りで自転車のベルが鳴った。先を走る子に、後ろの子が「待って」と呼びかける。今度は前の自転車が速度を落とし、二台は横に並んだ。土管の中で一人きりだった声に、地上では動きが返っていた。

作業机に戻ると、航は仕分け表を広げた。

「昨日の続き、話してもいい？」

「うん。でも、その前に、私の方から」

澪は青いカードを開いた。折り目は指でなぞっても消えなかった。彼女はそれを平らにするのをやめ、折り目の隣へ「昨日の続き」と書いた。窓の外では、待っていた二台の自転車が、同じ方向へ走り出していた。

語注・作品について

収蔵（しゅうぞう） 資料を集め、保管すること。

この作品は教材用の創作です。本文の土管は、現実の排水設備ではなく、外側とは異なる奥行きと規則をもつ幻想的な展示物として描いています。

答案を組み立てる準備

物語では、心情を表す言葉だけを探すのではなく、「どの場面で」「何をした・どのように描かれた」「そこから何が分かる」の三段階で根拠を整理します。

一 場面を名づける　展示室、土管の中、地上へ戻った後など、根拠のある場面を短く示す。

二 行動・描写を抜き出す　発言、手の動き、物の状態、音の響きなど、目に見える根拠を選ぶ。

三　前後を比べる　同じ物や言葉が繰り返される場合、何が同じで、反応や意味がどう変わったかを確かめる。

四　関係を定める　「〜ため」「〜のに対し」「〜から〜へ」などを使い、根拠と読みを一文につなぐ。

五　言い切りすぎない　象徴の意味は一つに決めつけず、本文の行動と描写から説明できる範囲に保つ。

設問

問一　発言の理由（60字以内）

展示室で、澪が「じゃあ、もう相談しなくていい」と言ったのはなぜか。直前の会話を踏まえ、60字以内で説明せよ。

準備メモ　場面名：午後の仕分け／行動・描写：航の発言のあと、澪は説明する前にカードを折る／そこから分かること：澪には、何を軽く扱われたように聞こえたか。

解答欄（60字）

問二　行動と心情（65字以内）

土管の中で澪が壁の文字を手袋でこすった行動と、その後、指先に青い染みが移った描写から、澪の心情がどのように動いたと読み取れるか。65字以内で説明せよ。

準備メモ　場面名：紙片の皿がある空洞／行動・描写：文字をこする・染みが指先へ移る／そこから分かること：自分の発言をどうしたいのか、また結果はどうだったか。

解答欄（65字）

問三　反復する物の働き（70字以内）

青いカードは、午後の仕分け、土管の中、結末で繰り返し描かれる。このカードは、澪と航の関係の変化を表すうえでどのような働きをしているか。70字以内で説明せよ。

準備メモ　場面名：仕分け・空洞・作業机／行動・描写：折る・二人で持ち帰る・折り目の隣へ書く／そこから分かること：途切れた会話と再開した会話をどう結ぶか。

解答欄（70字）

問四　二場面の関係（80字以内）

土管の中と地上で、どちらも自転車のベルと「待って」という声が描かれている。二つの場面の違いと、その違いが表すことを、80字以内で説明せよ。

準備メモ　場面名：土管の中・地上の通り／行動・描写：返事のない声・速度を落として並ぶ二台／そこから分かること：言葉を受けた側の反応があるかないか。

解答欄（80字）

問五　人物の変化（90字以内）

澪は、航との途切れた会話に対する姿勢を、物語の初めから結末までにどのように変えたか。土管の中で気づいたことと、結末の行動の両方に触れ、90字以内で説明せよ。

準備メモ　場面名：午後の仕分け・空洞・作業机／行動・描写：会話を切る・自分の声を聞く・「昨日の続き」と書く／そこから分かること：相手の言葉を決めつける姿勢から何へ変わったか。

解答欄（90字）

解答・解説

本文の流れ

展示室　幻想的な土管の規則と、展示カードの保存をめぐって澪と航の会話が途切れた経緯を示す。

土管の中　捨てられた物や途中で止まった言葉に触れ、澪と航が、互いに言わなかったこと・聞かなかったことを確かめる。

地上へ戻った後　同じ「待って」に行動が返る場面を見た二人が、持ち帰ったカードを前に会話を再開する。

問一　発言の理由（60字以内）

設問の意図　航の発言を澪がどのように受け取り、その受け取り方が発言へどうつながったかを因果で説明する。

根拠　航の「全部は残せないものもあるよ」と、澪には「紙はもう要らない」と言われたように聞こえたこと、説明する前にカードを折ったこと。

必要要素　①澪は、航が原紙を不要と決めたように受け取った。②筆圧や書き直しの跡まで軽く扱われたと感じた。③反発して会話を切った。

組み立て方　航が実際に何を考えていたかではなく、澪にどう聞こえたかを先に置き、「～と感じ、反発したため」とつなぐ。

模範解答　航が原紙を不要と決め、筆圧や書き直しの跡まで軽く扱ったように感じ、自分の考えを否定されたと思って反発したため。（55字）

別解例①　カードの画像だけ残せばよいという航の考えに聞こえ、紙に残る書き手の跡を大切にする思いを否定されたと感じたため。（55字）

別解例②　航がカードの原紙には価値がないと決めつけたように受け取り、自分の説明を聞く気もないと考えて、会話を切ったため。（55字）

☆**自己採点の観点**

□ 航の本心ではなく、澪が発言をどう受け取ったかを書いたか。

□ 原紙に残る筆圧や書き直しの跡を大切にする澪の考えを含めたか。

□ 受け取り方と「相談しなくていい」という反発を、60字以内の因果でつないだか。

答案で注意したい点 「航と意見が合わなかったから」だけでは、澪が何を軽く扱われたと感じたのかが示されない。

問二 行動と心情（65字以内）

設問の意図 文字をこする行動と、染みが移る結果を結び、発言を消したい思いから、消せないことへの気づきへ至る動きを読む。

根拠 澪が「もう相談しなくていい」という文字をこすったこと、「消える代わりに、青い染みが指先へ移った」こと、「消そうとしてこすった言葉は、場所を変えただけだった」とあること。

必要要素 ①相手を退けた自分の発言を消したい。②こすっても染みが移るだけで、発言の影響はなくならないと気づく。③二つを心情の動きとしてつなぐ。

組み立て方 行動の目的を「取り消したい」と示し、描写が示す結果を受けて、「〜から〜へ」と心情の動きにつなぐ。

模範解答 自分の発言を取り消したい思いから、こすっても染みが移るだけだと知り、言葉の影響は簡単になくならないと気づく心情へ動いた。（60字）

別解例① 会話を切った言葉をなかったことにしたい思いから、痕跡は自分へ移るだけで、発した言葉の結果は残ると悟る心情へ変わった。（58字）

別解例② 自分の硬い言い方を取り消したい願いから、文字が消えず指を染めたことで、発した言葉は簡単に消せないと知る心情へ変わった。（59字）

☆**自己採点の観点**

□ 「こする」行動を、発言を消したい思いと結びつけたか。

□ 青い染みが移る描写から、言葉の影響が残ることを読み取ったか。

□ 行動の目的と結果を、「〜から〜へ」という心情の動きとして65字以内にまとめたか。

答案で注意したい点　「後悔している」と心情語だけを書くのではなく、文字をこする行動と染みが移る描写を根拠にする。

問三　反復する物の働き（70字以内）

設問の意図　同じ青いカードが三つの場面でどのように扱われるかを追い、二人の関係の変化を一つの流れとして説明する。

根拠　澪がカードを二つ折りにして会話を閉じたこと、土管で二人が同時に手を伸ばして持ち帰ったこと、結末で折り目の隣へ「昨日の続き」と書いたこと。

必要要素　①折り目は会話の断絶を示す。②二人で持ち帰り、新しい言葉を書き足す。③断絶を消さずに会話を再開する変化をつなぐ。

組み立て方　「初めは～を示すが、最後には～を示す」と、同じ物の働きを前後で対比する。

模範解答　初めは澪が会話を閉ざしたことを折り目で示すが、最後には二人で持ち帰り新しい言葉を書き足すことで、途切れた対話を再開する変化を表す。（65字）

別解例①　カードの折り目は途切れた会話の痕跡となり、二人で持ち帰って新しい一行を加える行動は、その痕跡を残したまま関係を結び直すことを示す。（65字）

別解例②　澪が折ってしまい込む場面から、二人で拾い「昨日の続き」と記す結末までを結び、閉じた会話が二人の間でもう一度開かれる過程を形にする。（65字）

☆自己採点の観点

□　青いカードが登場する前後の場面を、少なくとも二つ結びつけたか。

□　折り目が残ることと、新しい言葉を書き足すことの両方を含めたか。

□　カードの意味を一語で決めず、二人の行動の変化として70字以内で説明したか。

答案で注意したい点　「カードは希望の象徴だ」とだけ書くと、本文中で実際にどのように扱われ、関係がどう変わったかが抜ける。

問四　二場面の関係（80字以内）

設問の意図　同じ音と言葉が置かれた二場面を比較し、呼びかけを受けた側の反応の違いが何を表すかを説明する。

根拠　土管では「待って」という声に返事も足音もなかったこと、地上では前の自転車が速度を落とし、二台が並んだこと、「地上では動きが返っていた」とあること。

必要要素　①土管では声が返事なく遠ざかる。②地上では呼びかけに速度を落とす行動が返る。③言葉が相手に受け止められることで、関係を動かす違い。

組み立て方　「土管では～のに対し、地上では～」で場面を対比し、その結果を「～ことを表す」とまとめる。

模範解答　土管では「待って」が返事なく遠ざかるのに対し、地上では相手が速度を落として二台が並ぶため、呼びかけは受け止める行動が返ることで関係を動かすと表している。（76字）

別解例①　土管の声は誰にも応じられず過去の響きとして消えるが、地上の声には相手が速度を落として待つ動作が返るため、言葉が現在のやり取りになる違いを示している。（74字）

別解例②　同じ呼びかけでも、土管では一人きりの声として残るが、地上では前の自転車が速度を落として二台を並ばせ、相手の応答が言葉をつながりへ変えることを表している。（76字）

☆自己採点の観点

□　土管の中と地上の両方について、声に対する反応を書いたか。

□　「暗い・明るい」だけでなく、返事のない声と速度を落とす行動を対比したか。

□　二場面の違いが、澪と航の会話の再開にもつながることを80字以内で説明したか。

答案で注意したい点　同じベルが鳴ったという共通点だけでは、二場面を置いた働きにならない。呼びかけに応答があったかを比べる。

問五　人物の変化（90字以内）

設問の意図　澪の発言、土管での気づき、結末の行動を順に結び、会話に対する姿勢の変化を本文全体から説明する。

根拠　初めに航の発言を決めつけて会話を切ったこと、土管で自分の言葉の硬さと消せない影響を知り、航の言わなかった続きを聞いたこと、結末で「昨日の続き」と書いたこと。

必要要素　①初めは自分の受け取り方だけで会話を閉じる。②互いに言わなかった・聞かなかった続きを確かめる。③相手の話を聞き、自分からも話して会話を続けようとする。

組み立て方　「初めは～したが、～と気づき、最後には～した」と、原因を挟んだ変化の文にする。

模範解答　初めは航の発言を自分への否定と決めつけて会話を切ったが、言葉の影響は消せず、言わない続きは届かないと知り、最後には互いの続きを聞いて話し直そうとした。（75字）

別解例①　航が原紙を軽視したと思い込んで相談を拒んだ澪は、土管の中で自分の言葉の硬さと消えない痕跡を知り、結末では折り目の隣に言葉を書き足して対話を再開した。（74字）

別解例②　相手の考えを聞かず「相談しなくていい」と閉じた姿勢から、発した言葉は消えず、言わない思いは伝わらないと気づき、自分から昨日の会話を続ける姿勢へ変わった。（76字）

☆自己採点の観点

□　物語の初めの澪と、結末の澪を対比したか。

□　土管で得た二つの気づきのうち、少なくとも一つを変化の理由にしたか。

□　「反省した」だけで終わらず、相手の話を聞き、自分も話すという結末の行動を90字以内で示したか。

答案で注意したい点　「仲直りした」とだけまとめると、澪が言葉をどう受け取り、どのように会話を再開したかという変化の過程が見えない。

第二章の学び　物語では、心情を直接表す語がなくても、人物の行動、反復する物、離れた場面の違いをつなぐことで、変化を根拠のある答案にできる。

第三章　列が止まって見えるとき

この章で身につける力　同じ出来事を二つの説明から捉え、直接の原因と、出来事を起こりやすくする条件を分け、具体例から共通する仕組みを50〜90字で説明する。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

①　昼休みの食堂で、会計の列が急に止まった。列の先では、一人の生徒がかばんの中を探している。やがて学生証が見つかり、会計は再び動き出した。後ろにいた人が「学生証をすぐ出さなかったから、列が長くなった」と言う。この説明は間違いではない。目の前で起きた停止のきっかけを、はっきり示しているからだ。

②　しかし、同じ列を少し離れた場所から見ると、別の説明もできる。昼休みが始まって十分ほどの間に、多くの生徒が一度に食堂へ来る。会計台は一つで、一人の会計が終わるまで次の人は進めない。学生証を探した時間が短くても、すでに後ろへ人が続いていれば、その停止は列全体へ広がる。ここでは、一人の行動だけでなく、人が来る速さと、会計が進む速さとの関係が問題になる。

③　前者を、出来事に近づいて見る説明と呼ぶことにしよう。誰が何をしたため、その瞬間に何が起きたかを示す説明である。後者は、出来事を流れの中で見る説明である。どのような配置や時間帯のもとで、小さな停止が大きな混雑へ変わったかを示す。二つは、どちらか一方だけが正しいのではない。答えようとする問いの大きさが異なっている。

④　「なぜ今、列が止まったのか」と問うなら、学生証を探したことは直接の原因になる。けれど、「なぜ昼休みには、短い停止でも長い列ができるのか」と問うなら、人が集中する時間帯、会計台の数、次の人が先に進めない並び方が条件になる。原因は出来事を動かしたきっかけを指し、条件は、そのきっかけの影響が現れやすい状態を指す。両者を区別すると、説明の対象が明確になる。

⑤　この区別は、責任をぼかすためのものではない。学生証を準備しておけば、その人の会計は早く終わっただろう。一方で、一人ひとりが十分に準備しても、人が来る速さが会計の速さを上回る時間が続けば、列はできる。個人の行動を直す提案と、会計台や来店時刻を工夫する提案とは、働きかける場所が違うのである。

⑥　たとえば、文化祭の飲み物売り場でも似たことが起こる。注文を聞き返したことが、その場の停止を生む場合はある。しかし、休憩時間の開始と同時に客が集まり、注文を受ける係と飲み物を渡す係が同じ人なら、別の注文でも列は伸びやすい。聞き返しを減らす表示は直接の停止を減らし、役割を分けることは、停止が後ろへ広がりにくい流れを作る。

⑦　反対に、同じ改善がいつでも有効とは限らない。食堂の会計台を二つに増やしても、料理を受け取る場所が一つで、そこで人が滞れば、混雑する場所が移るだけである。文化祭で係を増やしても、注文が少ない時間には手が余る。仕組みの説明は、どこか一箇所を「悪い部分」と名づければ完成するものではない。人や物が、どこから来て、どこを通り、どこで待つかを確かめる必要がある。

⑧　また、列の長さだけを見ても、利用する人の経験は分からない。十人が並んでいても一定の速さで進めば、見通しを持ちやすい。三人しかいなくても、なぜ止まっているか分からなければ、長く感じることがある。ここでは、実際にかかった時間と、先を予測できるかどうかという別の観点が加わる。何を「混雑」と呼ぶかによって、集めるべき事実も変わる。列が最も長かった瞬間だけを数えれば人数は分かるが、一人が何分待ったかは分からない。逆に、待った人へ感想だけを尋ねても、どこで流れが止まったかは確かめにくい。人数、到着時刻、処理にかかった時間、止まった場所を分けて記録すれば、個人の経験と全体の流れを混同せずに比べられる。説明の違いは、見る位置だけでなく、どの事実を集めるかにも表れるのである。

⑨　だから、説明を作る前には、まず問いを定めなければならない。ある瞬間の停止を説明したいのか、同じ種類の混雑が繰り返される理由を説明したいのか、それとも利用者が不安を感じる理由を説明したいのか。問いが違えば、必要な根拠の範囲も、原因と呼ぶものも

違う。目に入りやすい一人の行動だけで、広い問いへ答えようとすると、説明が足りなくなる。

⑩　一方、仕組みだけを語り、目の前の行動を何も確かめないのも不十分である。学生証の読み取り機が止まったのか、本人が探していたのか、係が確認を求めたのかによって、その場で必要な対応は変わる。広い条件を知ることと、個々の出来事を丁寧に見ることとは、互いを打ち消さない。近くを見る説明と、流れを見る説明を往復することが大切なのである。

⑪　同じ出来事に二つの説明を置く目的は、もっともらしい理由を増やすことではない。問いに合う範囲を選び、直接の原因と、それを生じやすくする条件を分けるためである。そのうえで両者を関係づければ、「誰のせいか」だけに急ぐことも、「仕組みの問題だ」と個々の事実を消すことも避けられる。答えの形は、原因を一つ選ぶことに限られない。説明は、出来事へ名前を付けて終えるものではなく、どこを確かめ、どこへ働きかけるかを決めるための実用的な道具なのである。

本文の食堂と文化祭は、原因と条件の違いを考えるために設定した教材上の例です。特定の学校や施設の出来事を報告したものではありません。

答案を組み立てる準備

第三章では、完成答案の部品を先に示しません。本文から根拠を選び、二つ以上の根拠がどの関係にあるかを自分で短くメモします。

一　問いの範囲を決める　ある瞬間、繰り返される仕組み、利用者の経験のどれを説明するのか確かめる。

二　根拠を選ぶ　指定された段落から、問いに必要な具体例や説明を二つまで選ぶ。

三　原因と条件を分ける　出来事を直接動かしたきっかけと、その影響を現れやすくした状態を区別する。

四　関係を一語で示す　対比、因果、具体と共通点、条件と結果など、根拠同士のつながりを決める。

五　説明の広さを点検する　狭い根拠だけで広い結論を出していないか、逆に個々の事実を消していないか確かめる。

設問

問一　二つの説明（50字以内）

第三段落で述べる「出来事に近づいて見る説明」と「出来事を流れの中で見る説明」は、何を明らかにする点で異なるか。50字以内で説明せよ。

根拠メモ　第三段落から、二つの説明がそれぞれ答える問いを抜き出す。

関係メモ　二つを同じ観点で対比する。

解答欄（50字）

問二　原因と条件（60字以内）

第四段落を踏まえ、昼休みの列が長くなる場面で、学生証を探すことと、人が集中する時間帯とはどのように区別されるか。60字以内で説明せよ。

根拠メモ　第四段落の「直接の原因」「条件」の説明を確かめる。

関係メモ　きっかけと、影響を現れやすくする状態として分ける。

解答欄（60字）

問三　改善の限界（70字以内）

第五段落によれば、一人ひとりが学生証を準備しても、列がなくなるとは限らないのはなぜか。個人の行動と全体の流れを関係づけ、70字以内で説明せよ。

根拠メモ　第五段落から、個人の会計と列全体に関する記述を選ぶ。

関係メモ　個人の改善を認めたうえで、残る条件を示す。

解答欄（70字）

問四　具体例の共通点（80字以内）

食堂と文化祭の例に共通して、短い停止が列全体へ広がりやすくなるのは、どのような仕組みがあるときか。第二・第六段落を踏まえ、80字以内で説明せよ。

根拠メモ　二つの例から、人が来る時期と処理の進み方に関する箇所を選ぶ。

関係メモ　異なる具体例を、共通する原因・条件の形へまとめる。

解答欄（80字）

問五　本文全体の結論（90字以内）

筆者は、出来事を説明して改善へつなげるには、二つの説明をどのように用いるべきだと考えているか。問いの範囲、原因と条件、両者の関係に触れ、90字以内で説明せよ。

根拠メモ　第三・第九〜第十一段落から、説明を作る順序に関わる箇所を選ぶ。

関係メモ　問いを定めることを出発点に、二つの説明を結びつける。

解答欄（90字）

解答・解説

本文の流れ

第一～第四段落　食堂の列を例に、出来事に近い説明と流れを見る説明を区別し、原因と条件を定義する。

第五～第八段落　二つの説明が異なる改善につながることを示し、改善の効果や「混雑」の捉え方にも条件があると述べる。

第九～第十一段落　問いの範囲を先に定め、個々の事実と広い条件を往復して、確かめる場所と働きかける場所を決めることを結論とする。

問一　二つの説明（50字以内）

設問の意図　二つの説明を、近い・遠いという位置だけでなく、それぞれが明らかにする内容の違いとして対比する。

根拠　第三段落の「誰が何をしたため、その瞬間に何が起きたか」と「どのような配置や時間帯のもとで、小さな停止が大きな混雑へ変わったか」。

必要要素　①近づく説明は、その瞬間の行動と結果を示す。②流れの説明は、影響を広げる配置や時間帯を示す。

組み立て方　主語を二つの説明にそろえ、「前者は～のに対し、後者は～」で明らかにする対象を対比する。

模範解答　近づく説明はその瞬間の行動と結果を示し、流れを見る説明は小さな停止の影響を広げる配置や時間帯を示す。（50字）

別解例①　前者は誰のどの行動が停止を生んだかを明らかにし、後者は停止が混雑へ変わる仕組みや条件を明らかにする。（50字）

別解例②　出来事に近い説明が停止の直接のきっかけを示すのに対し、流れの説明は影響が広がる配置や時間帯を示す。（49字）

☆自己採点の観点

□　二つの説明の両方を、同じ一文で説明したか。

□　瞬間の行動と結果、影響を広げる配置や時間帯を対比したか。

□　「近くと遠くから見る」という位置の違いだけで終わらず、50字以内に組み直したか。

答案で注意したい点　「見方が違う」とするだけでは、それぞれの説明が何を明らかにするかが示されない。

問二　原因と条件（60字以内）

設問の意図　同じ場面にある二つの事柄を、出来事を直接動かす原因と、その影響を現れやすくする条件へ分ける。

根拠　第四段落の「学生証を探したことは直接の原因」と「人が集中する時間帯、会計台の数、次の人が先に進めない並び方が条件」。

必要要素　①学生証を探すことは停止の直接のきっかけである。②人が集中する時間帯は、停止を長い列へ広げやすくする状態である。

組み立て方　「学生証を探すことは～であり、時間帯は～である」と、二つを原因・条件の定義へ対応させる。

模範解答　学生証を探すことは会計をその場で止める直接の原因であり、人が集中する時間帯は、その停止を長い列へ広げる条件である。（57字）

別解例①　学生証を捜す行動がその瞬間の停止を生む原因なのに対し、昼休みの人の集中は、小さな停止の影響を大きくする条件である。（57字）

別解例②　会計を直接止めるきっかけが学生証探しであり、人が一度に集まる時間帯は、その遅れが後ろへ及びやすくなる条件である。（56字）

☆自己採点の観点

□　学生証を探すことと、人が集中する時間帯を別々に説明したか。

□　前者を直接の原因、後者を影響が広がる条件として対応させたか。

□　「どちらも原因」と並べず、二つの関係を60字以内で示したか。

答案で注意したい点　時間帯まで直接の原因とすると、停止のきっかけと、停止が広がる状態との区別が消える。

問三　改善の限界（70字以内）

設問の意図　個人の準備が持つ効果を認めながら、それだけでは列全体の条件を変えられないという限定を説明する。

根拠　第五段落の「学生証を準備しておけば、その人の会計は早く終わった」と「人が来る速さが会計の速さを上回る時間が続けば、列はできる」。

必要要素　①準備は各人の会計を短くする。②人の到着が会計の処理より速ければ、全体として待つ人が増える。③個人の改善だけではその条件が残る。

組み立て方　個人の改善を「～ても」と認めた後、「～なら、～ため」と全体の流れが残る条件を加える。

模範解答　一人ずつの会計時間は短くなっても、人が食堂へ来る速さが会計の進む速さを上回り続ければ、処理を待つ人が増えるから。（56字）

別解例①　学生証の準備で各人の会計を早められても、利用者が来る量を会計が処理できない時間が続けば、後ろに待つ人がたまるから。（57字）

別解例②　個人が学生証を用意すればその人の停止は減るが、来る人の速さが会計の速さより大きいままなら、列全体は伸びていくから。（57字）

☆自己採点の観点

□　学生証を準備する効果を否定せずに書いたか。

□　人が来る速さと、会計が進む速さを比べたか。

□　個人の改善と全体の条件を「～ても、～なら」で関係づけ、70字以内にしたか。

答案で注意したい点　「会計台が一つだから」だけでは、到着と処理の速さの関係が示されず、列が伸びる理由が十分ではない。

問四　具体例の共通点（80字以内）

設問の意図　二つの具体例で異なる人や作業を外し、短い停止が列全体へ広がる共通の仕組みを抽象化する。

根拠　第二段落の、人が一度に来て一人ずつ会計することと、第六段落の、休憩開始時に客が集まり、注文と受け渡しを同じ人が行うこと。

必要要素　①利用者が短い時間に集中する。②一人または一つの場所が順に処理する。③到着が処理を上回る状態で停止が後続へ伝わる。

組み立て方　食堂と文化祭に共通する二条件を示し、「そのため、～」で停止が広がる結果へつなぐ。

模範解答　利用者が短い時間に集中する一方、会計や注文を一人ずつ順番に処理するため、到着が処理を上回り、小さな停止が後ろへ伝わる仕組みがある。（65字）

別解例①　人が一度に集まるのに、会計や受け渡しが一つの場所で順番にしか進まないため、処理より到着が速くなり、一人の停止が列全体へ広がりやすい。（66字）

別解例②　食堂も売り場も、客が集中する時間と、一件ずつ処理する場所が重なり、来る人の量が処理できる量を超えるため、短い停止の影響が後続へ及ぶ。（66字）

☆自己採点の観点

□　食堂と文化祭の両方に共通する内容として説明したか。

□　利用者の集中と、一件ずつ処理する流れの二つを含めたか。

□　具体的な役名だけを並べず、停止が後続へ広がる仕組みとして80字以内にまとめたか。

答案で注意したい点　「どちらも混雑している」では、共通点を言い換えただけで、混雑が生じる仕組みにならない。

問五　本文全体の結論（90字以内）

設問の意図　問いを定めること、二種類の根拠を選ぶこと、原因と条件を関係づけることを、改善へ至る説明の順序として統合する。

根拠　第三段落の二つの説明、第九段落の「まず問いを定める」、第十段落の「互いを打ち消さない」、第十一段落の「どこへ働きかけるかを決める」。

必要要素　①説明したい問いの範囲を定める。②個々の行動から直接の原因を、流れから条件を選ぶ。③両者を結び、確かめる場所と改善する場所を判断する。

組み立て方　「まず～。そのうえで～し、～を決める」と、問い、根拠、関係、改善の順に一文または二文でつなぐ。

模範解答　まず説明する問いの範囲を定め、個々の行動から直接の原因を、全体の流れから影響を広げる条件を選び、両者を結んで確認先と改善点を決めるべきだ。（69字）

別解例①　ある瞬間か繰り返す混雑かという問いを先に定め、近くの行動と広い流れを確かめて原因と条件に分け、二つを関係づけて有効な働きかけを選ぶべきだ。（69字）

別解例②　問いに合う範囲を決めたうえで、目の前の行動が生む原因と、影響を大きくする配置や時間の条件を区別し、双方から事実の確認先と改善点を定めるべきだ。（71字）

☆自己採点の観点

□　問いの範囲を先に決めることを含めたか。

□　個々の行動と全体の流れを、原因と条件へ分けたか。

□　二つを対立させず、改善する場所を判断するために結びつけると90字以内でまとめたか。

答案で注意したい点　「二つの見方が大切だ」だけでは、何をどの順に確かめ、説明を改善へどう結ぶかが示されない。

第三章の学び　具体例から共通の仕組みを取り出すときは、直接の原因と条件を区別し、問いの広さに合う根拠を選ぶ。

第四章　光の遅さについて

この章で身につける力　科学的事実と、それを用いた比喩を区別し、両者の共通点と限界、反例と条件を関係づけて60〜100字の答案を組み立てる。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

①　光は、私たちの日常の感覚では、ほとんど瞬時に届くように見える。しかし、真空中を進む光の速さは、一秒間に二億九千九百七十九万二千四百五十八メートルと定められている。非常に速くても、離れた場所へ届くには時間がかかる。地球は太陽から約八光分の距離にあるため、私たちが太陽の光を受け取るのは、その光が太陽を出てからおよそ八分後である。

②　ここで述べたのは物理的な事実である。光には有限の速さがあり、進む距離が長ければ、届くまでの時間も長くなる。したがって、遠くの天体を見るとき、私たちはその天体の「こちらへ光が出た時点」の姿を見ている。今ここで見えている像と、天体の側の同じ瞬間の状態とが一致するとは限らない。

③　この事実から、人が何かを理解する場面を考えてみたい。話を聞いたその場では意味をつかめず、あとで別の出来事と結びついたとき、言葉の重みが分かることがある。会議では反対だと思った提案が、資料を読み直すと、別の条件を守るためのものだったと気づくこともある。最初の発言が変わったのではない。受け手の側に、比べる資料や前後関係が増え、発言を置く位置が変わったのである。出来事が起きた時点と、その意味が自分の中に形を取る時点との間には、隔たりが生じる場合がある。

④　この隔たりを「理解が遅れて届く」と表すなら、光の遅さは一つの比喩になる。共通しているのは、受け手が今受け取っているものが、送り出された時点と同じ「今」ではないという点である。私たちは、届いた光から天体の以前の姿を知り、残された言葉や資料から、すでに起きた出来事の意味を考える。受け取る時点の遅れが、過去と現在の間を意識させる。

⑤　ただし、共通点があるからといって、二つを同じ仕組みだと考えてはいけない。光が届くまでの時間は、真空中なら距離と光速の関係から求められる。同じ距離なら、観察者が急いでいるか、落ち着いているかによって所要時間が変わるわけではない。人の理解にかかる時間は、そのようには決まらない。知識が増えたために分かることも、相手から説明を受けて分かることもある。反対に、長い時間を置いても、根拠を確かめなければ理解が進まない場合もある。

⑥　さらに、光は届けば物理的な信号として受け取られるが、言葉や出来事の意味は一つに固定されて届くわけではない。同じ発言でも、前後の文脈や、誰に向けられたかによって受け取り方が変わる。新しい資料によって、以前の解釈を直すこともある。人の理解は、遅れて到着する荷物のように、待っていれば完成品が届く過程ではない。受け手が根拠を選び、関係を組み直す働きを含んでいる。

⑦　それなら、答えを遅く出すほどよいのだろうか。そうではない。火災を知らせる警報を受けたときは、意味を深く考える前に避難する必要がある。提出時刻や集合場所のように、確認できる情報は早く正確に伝える方がよい。速さを求めること自体が浅さなのではなく、何を今すぐ決め、何を確かめ直すべきかを分ける必要がある。

⑧　反対に、「まだ考えている」と言い続けることが、理解を深めるとは限らない。判断に必要な資料を読まず、相手へ質問もせず、決定を避けているだけなら、時間は根拠を増やさない。遅れを意味のあるものにするのは、ただ待つことではなく、見落とした条件を探し、最初の解釈と照らし合わせる行動である。時間の長さより、その間に何を確かめたかが重要になる。

⑨　たとえば、班で企画案を決めた直後、ある人の短い返事を「不満なのだ」と受け取ったとする。あとで議事メモを読み、その人が費用の条件を繰り返し尋ねていたと気づけば、返事は不満ではなく確認の不足を示していた可能性が出てくる。さらに本人へ「費用の条件が分かりにくかったか」と尋ねれば、その解釈も確かめられる。別の根拠が増えれば、最初とは違う説明が成り立つが、本人の答えを聞く前に新しい解釈を事実と決めることもできな

い。ここで理解を変えたのは、時間が自然に答えを運んだことではない。離れた発言を結び、別の説明が成り立つかを確かめたことである。

⑩　このように、光の遅さという事実は、出来事と理解の間に時間差があり得ることを考える入口になる。だが、比喩は結論の証明ではない。「光が遅れて届くのだから、人も待てば必ず理解できる」とは言えない。共通する形を手がかりにしながら、異なる仕組みを外さずに見るとき、比喩は考える範囲を広げる。

⑪　私たちに必要なのは、速さか遅さのどちらかを選ぶことではない。いま判断すべき事柄では、確かな情報を早く受け取って行動する。一度の受け取り方で意味を決められない事柄では、根拠を探し、結びつけ方を直すための時間を置く。問い直すことは、答えを遅らせる口実ではなく、受け取り方を確かめる作業である。光の遅さは、その区別を直接教える法則ではないが、「いま見えているものは、いつ、どこから届いたのか」と問い直す視点を与えるのである。

第一・第二段落の数値と説明は、国際度量衡局（BIPM）によるメートルの定義と、NASAによる地球・太陽間の光の所要時間の説明に基づきます。科学的事実と、第三段落以降の筆者の比喩・考察を区別して読んでください。出典は巻末の「本文資料」に示します。

答案を組み立てる準備

第四章では、根拠が「科学的事実」「筆者の比喩」「両者の共通点」「比喩の限界」のどれに当たるかを考えます。完成答案の要素は自分で選びます。

一　事実の範囲を確かめる　数値や観察から直接言えることと、筆者がそこから考えたことを分ける。

二　比喩の対応を探す　何と何を比べ、どの点を共通すると見ているかを確かめる。

三　同一視を避ける　似ている点だけでなく、仕組みが異なる点を根拠から選ぶ。

四　反例を位置づける　反対の例が主張全体を否定するのか、成り立つ範囲を限定するのかを判断する。

五　条件を残して書く　「必ず」「遅いほどよい」と広げず、どのような場合かを答案に残す。

設問

問一　科学的事実（60字以内）

第一・第二段落によれば、遠くの天体を見ることが、その天体の現在と同じ瞬間を見ることにならないのはなぜか。60字以内で説明せよ。

根拠メモ　光の速さ、距離、見えている像の時点に関する記述を選ぶ。

関係メモ　距離があることと、届くまでの時間を因果で結ぶ。

解答欄（60字）

問二　比喩の共通点（70字以内）

第四段落で、光の遅さを「理解が遅れて届く」ことの比喩にできるのは、両者にどのような共通点があるからか。70字以内で説明せよ。

根拠メモ　光を受け取る場面と、言葉や資料から意味を考える場面を選ぶ。

関係メモ　送り出された時点と受け取る時点のずれとしてまとめる。

解答欄（70字）

問三　比喩の限界（80字以内）

第五・第六段落を踏まえ、光が届く過程と、人が理解へ至る過程を同じ仕組みだと言えない理由を80字以内で説明せよ。

根拠メモ　到着時間の決まり方と、理解に必要な働きに関する箇所を選ぶ。

関係メモ　二つの違いを対比し、同一視できないという結論へつなぐ。

解答欄（80字）

問四　反例と条件（90字以内）

第七・第八段落は、「理解には時間が必要な場合がある」という考えを、どのように限定しているか。速い判断が必要な場合と、時間を置く場合の条件を含め、90字以内で説明せよ。

根拠メモ　すぐ行動する例と、時間を有効にする行動を一つずつ選ぶ。

関係メモ　速さ・遅さの優劣ではなく、事柄と行動の条件として結ぶ。

解答欄（90字）

問五　事実と比喩の統合（100字以内）

筆者は、光の遅さという事実を、人の理解について考えるためにどのように用いているか。共通点、比喩の限界、筆者が得る視点に触れ、100字以内で説明せよ。

根拠メモ　第四〜第六・第十・第十一段落から、比喩の働きと限定を選ぶ。

関係メモ　事実から共通点を取り出し、限界を置いたうえで、問い直す視点へまとめる。

解答欄（100字）

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落　光の速さと太陽までの光の所要時間を示し、遠くを見ることは以前の姿を見ることだと説明する。

第三・第四段落　出来事と理解の間にも時間差が生じる場合を示し、光の遅さとの共通点を比喩として取り出す。

第五・第六段落　光の伝わり方と人の理解が異なる仕組みであり、理解には根拠を選び直す働きがあると限定する。

第七～第十一段落　速い判断が必要な場合と、時間を置いて確かめる場合を分け、比喩を問い直す視点として用いることを結論とする。

問一　科学的事実（60字以内）

設問の意図　遠くの像が過去の姿になることを、印象的な表現ではなく、光の有限の速さと距離の関係から説明する。

根拠　第一段落の「非常に速くても、離れた場所へ届くには時間がかかる」と、第二段落の「こちらへ光が出た時点の姿」。

必要要素　①光には有限の速さがある。②離れた天体から届くまでに時間がかかる。③見えるのは光が出た時点の姿である。

組み立て方　「光は～ため、今届いた光は～」と、事実と観察の結果を因果でつなぐ。

模範解答　光には有限の速さがあり、遠い天体から届くまでに時間を要するため、今見えるのは、光が天体を出た時点の姿だから。（54字）

別解例①　天体から出た光が距離を進んで地球へ届くには時間がかかり、私たちは到着した光が伝える以前の姿を見ているから。（53字）

別解例②　光は非常に速くても瞬時には届かず、遠くから来るほど時間がかかるので、見える像は光が出発したときの状態だから。（54字）

☆**自己採点の観点**

□ 光の速さが有限であることを含めたか。

□ 距離があるため、届くまでに時間がかかると因果で示したか。

□ 「過去が見える」とだけ書かず、何の時点の姿かを60字以内で説明したか。

答案で注意したい点 「太陽まで八分かかるから」だけでは、太陽以外の遠い天体にも成り立つ理由が説明できない。

問二 比喩の共通点（70字以内）

設問の意図 光と理解を同じものとせず、比喩が対応させている「送り出す時点」と「受け取る時点」の関係を示す。

根拠 第四段落の「送り出された時点と同じ『今』ではない」と、光から以前の姿を知り、残された言葉や資料から出来事の意味を考えるという対応。

必要要素 ①受け手が現在受け取る。②受け取る対象は以前に送り出されたものに基づく。③過去と現在の間に時間差がある。

組み立て方 光と理解の二場面を並べ、「どちらも～」で、受け取る現在と送り出された過去のずれへまとめる。

模範解答 受け手が今得ているものは以前に送り出された光や残された言葉に基づき、出来事の時点と受け取って意味を知る時点に隔たりがあるから。（63字）

別解例① 今届く光が天体の以前の姿を伝えるように、人も残された言葉や資料から過去の出来事をあとで捉え、発生と理解の時点がずれるから。（61字）

別解例② 光も理解も、受け取る現在には、すでに送り出された像や言葉を手がかりとするため、対象の出来事とそれを知る時点が同じではないから。（63字）

☆**自己採点の観点**

□ 光と理解の両方について、受け取る対象を示したか。

□ 出来事が起きた時点と、受け手が知る時点のずれを共通点にしたか。

□ 「どちらも遅い」と性質だけを並べず、70字以内で関係を説明したか。

答案で注意したい点　「理解は光のように進む」と書くと、本文が比べている時間差以外まで同じ仕組みだと広げてしまう。

問三　比喩の限界（80字以内）

設問の意図　光の到着時間が決まる条件と、人の理解が進む条件を対比し、似た形だけから同一視できない理由を説明する。

根拠　第五段落の、光の所要時間は距離と光速の関係から求められること、第六段落の、意味は固定されず、受け手が根拠を選び関係を組み直すこと。

必要要素　①光の所要時間は距離と速度の関係で決まる。②理解は知識・説明・文脈や、根拠を組み直す働きに左右される。③待つだけでは完成しない。

組み立て方　「光は～のに対し、理解は～ため」と、時間の決まり方と受け手の働きを対比する。

模範解答　光の到着時間は距離と光速で決まるのに対し、理解は知識や文脈に左右され、受け手が根拠を選び直して関係を組み立てる必要があるから。（63字）

別解例①　光は距離に応じた時間がたてば信号として届くが、言葉の意味は固定されず、理解には前後の文脈を確かめ、解釈を修正する働きが必要だから。（65字）

別解例②　光が届く遅れは距離と速度で定まる一方、人の理解は時間だけで生じず、新しい知識や説明を得て、根拠のつなぎ方を直す必要があるから。（63字）

☆自己採点の観点

□　光の到着時間が距離と速さから決まることを含めたか。

□　理解には文脈や、根拠を組み直す受け手の働きがあると示したか。

□　「物理と心は違う」とだけ書かず、違う仕組みを80字以内で対比したか。

答案で注意したい点　理解の方が遅い、または深いとするだけでは、二つを同じ仕組みとみなせない理由にならない。

問四　反例と条件（90字以内）

設問の意図　速さを否定するのではなく、速い判断が必要な事柄と、時間を置くことで理解を直せる事柄の条件を分ける。

根拠　第七段落の警報・時刻・場所の例、第八段落の「ただ待つことではなく、見落とした条件を探し、最初の解釈と照らし合わせる行動」。

必要要素　①安全や確認可能な情報では、早い判断・伝達が必要である。②一度の受け取りで決められない意味は時間を置ける。③その間に根拠を増やし、照合することが条件である。

組み立て方　「～では早く～する一方、～では、ただ待たず～する」と、事柄と行動の条件を対応させる。

模範解答　安全に関わる警報や確認できる時刻は早く判断する一方、意味を一度で決められない事柄では、ただ待たず資料や条件を探し、最初の解釈を確かめ直す時間が必要だと限定する。（80字）

別解例①　警報への対応や明確な情報の伝達は急ぐべきだが、解釈が定まらない出来事は、時間を置くだけでなく、資料を読み質問して受け取り方を修正するときに限り、遅れが役立つとする。（82字）

別解例②　速い答えを一律に浅いとはせず、緊急時や確かめられる情報では速さを優先し、複数の意味がある事柄では、見落とした条件を探して解釈を照合するときに時間が有効だとする。（80字）

☆自己採点の観点

□　速い判断が必要な場合を一つ含めたか。

□　時間を置く場合には、資料・質問・条件の確認が必要だと示したか。

□　速さと遅さを優劣にせず、どのような事柄・行動の場合かを90字以内でまとめたか。

答案で注意したい点　「急がず考えるべきだ」だけでは、緊急時の反例と、待つことを有効にする条件の両方が落ちる。

問五　事実と比喩の統合（100字以内）

設問の意図　物理的事実から比喩の共通点を取り出し、その限界を保ったまま、人の理解を点検する視点へまとめる。

根拠　第四段落の時間差という共通点、第五・第六段落の仕組みの違い、第十段落の「比喩は結論の証明ではない」、第十一段落の「いつ、どこから届いたのか」。

必要要素　①光と理解には、送り出す時点と受け取る時点のずれがある。②理解は距離と速度では決まらず、根拠を組み直す。③比喩を証明にせず、受け取ったものの由来を問い直す。

組み立て方　「光の事実から〜という共通点を取り出す。ただし〜。そこで〜という視点を得る」と、対応・限定・働きの順に置く。

模範解答　光が以前の姿を運ぶ事実から、出来事と理解の時点がずれる共通点を取り出す。ただし理解は距離と速度で決まらず、根拠を組み直す働きだと限定し、今の受け取りがいつどこから来たかを問う視点にする。（93字）

別解例①　遠くから届く光が過去の像を示すことを、言葉の意味があとで分かる場合の比喩に用いる一方、待てば理解が完成するとはせず、資料や文脈を結び直し、目の前の解釈の由来と条件を確かめる視点を導く。（92字）

別解例②　光と理解に、送り出された時点と受け取る時点の隔たりを見いだすが、理解には受け手の解釈と修正が要るため、両者を同一視しない。その限定を保ち、今見えている意味の時点と根拠を問うために比喩を使う。（95字）

☆自己採点の観点

□　光と理解に共通する時間差を示したか。

□　理解は距離と速度だけで決まらず、受け手が根拠を組み直すと限定したか。

□　比喩を人間理解の証明にせず、受け取りの時点や由来を問い直す視点として100字以内でまとめたか。

答案で注意したい点　「人も光のように遅れて理解する」と言い切ると、比喩の共通点だけを取り、第五・第六段落の限界を落としてしまう。

第四章の学び　比喩を用いた評論では、事実と比喩を分け、似ている点と異なる仕組みの両方を答案へ入れる。

本文資料

研究結果を本文の一般的な結論へ広げすぎないよう、実験条件と結果を確認したうえで学習用に要約しています。

国際度量衡局（BIPM）「SI base unit: metre (m)」　真空中の光速を299,792,458 m/sとするメートルの定義。

NASA Science「What is a light-year?」　地球が太陽から約八光分の距離にあることの解説。

NASA Science「Cosmic Distances」　遠い天体を見ることと、以前の姿を見ることの関係についての解説。

第五章　静かな場所に声を置く

この章で身につける力　同じ事実を異なる優先事項から捉える複数の立場を整理し、共通点、譲歩、条件、限定を保って70〜110字の答案を組み立てる。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

① ある町の図書館で、利用者から二つの要望が寄せられた。静かな場所で勉強したいので、会話をもっと厳しく止めてほしいという要望と、資料を広げて相談できる席を作ってほしいという要望である。どちらも図書館を利用したい人の声だが、求める環境は同じではない。図書館は、館内の声をどのように扱うか、あらためて話し合うことにした。

② 現在の案内には、「周囲に配慮し、小さな声で話してください」とある。一見すると、静けさと会話を両立させる柔軟な決まりに見える。ところが、どこまでが小さな声かは、人や場面によって判断が分かれる。会話をしている側には十分小さくても、文章を集中して読んでいる側には、言葉の内容まで耳に入り、考えが途切れることがある。

③ 静かな環境を求める人が優先するのは、音の少なさだけではない。席に着いた後も同じ状態が続くと予測できることである。たまたま周囲が静かな席では、あとから会話が始まるかもしれず、安心して長い文章へ集中しにくい。注意を申し出れば自分が対立を作るように感じ、席を移れば用意した資料を片づけなければならない。だからこの立場は、静かな区域をはっきり決め、そこでの会話を制限するよう求める。

④ 一方、相談できる席を求める人は、声を出す自由だけを主張しているのではない。図鑑を見比べる、地域の資料を読み合わせる、学習の分からない点を説明し合うなど、資料を間に置いた会話も図書館の利用だと考える。会話を全面的に外へ移すと、本を借りてすぐ確かめることが難しくなり、一人では使いにくい資料から遠ざかる人もいる。この立場が優先するのは、資料と対話を同じ場所で利用できることだ。

⑤　職員には、さらに別の関心がある。決まりは、初めて来た人にも分かり、忙しい時間でも一貫して案内できなければならない。「周囲の迷惑にならない声」という表現だけでは、注意するかどうかが担当者によって変わりやすい。反対に細かな禁止事項を増やしすぎれば、説明と確認に時間がかかる。職員は、異なる利用を支えながら、現場で運用できる明確さを優先する。

⑥　三つの立場は、互いにまったく別の事実を見ているわけではない。館内には、静かに読みたい人と、資料を使って話したい人が同時にいる。現在の「小さな声」という決まりでは、利用者が選んだ席の環境を事前に予測しにくく、職員の案内にも揺れが出る。共有しているのは、この予測の難しさである。しかし、その事実だけから、会話をなくすべきか、認めるべきかは決まらない。

⑦　なぜなら、同じ予測の難しさに対し、それぞれが守りたいものが異なるからだ。静けさを求める人は、集中が途中で破られないことを守りたい。会話席を求める人は、資料を介した共同の学びを守りたい。職員は、誰に対しても説明できる決まりと、限られた人員で続けられる運用を守りたい。事実の一致は議論の出発点にはなるが、優先事項の違いを自動的には解消しない。

⑧　そこで、館内を「静音区域」と「会話区域」に分ける案が出た。入口の案内図と机の表示で区域を示し、会話区域では通常の話し声より抑えた声を認める。静音区域では短い確認も館外か会話区域で行う。利用者が席を選ぶ前に環境を予測できる点で、この案は三つの立場に共通する困り事へ応えようとしている。

⑨　ただし、区域を分ければ問題が解決するとは限らない。二つの区域が近ければ、会話の音は境界を越える。会話区域が少なすぎれば、必要とする人が利用できず、静音区域が少なすぎれば、集中する席を確保できない。表示を増やしても、初めて来た人に意味が伝わらなければ、職員の説明は減らない。分ける案を支持する場合も、配置、席数、案内の分かりやすさという条件を確かめる必要がある。

⑩　また、費用をかけて壁を作ることだけが方法ではない。午前中は全席を静音とし、放課後の一定時間だけ一部を会話席にする案もある。移動できる棚や吸音性のある仕切りを試

す案もある。それぞれ、利用時間を限定する、席の配置を変える、音の伝わり方を弱めるという、異なる場所へ働きかける。どの方法がよいかは、実際にどの時間帯に、どの席で困り事が生じているかによって変わる。

⑪　ここで注意したいのは、譲歩を、相手の要求を半分だけ受け入れることと考えないことである。静かな環境の必要を認めることは、会話する利用を価値の低いものとみなすことではない。資料を介した会話の意義を認めることも、どこでも話してよいとすることではない。相手が譲れない条件を正確に認めたうえで、自分の案がその条件をどこまで守れるかを示すことが、議論での譲歩である。

⑫　図書館は、まず一か月だけ区域分けを試すことにした。利用者には、単に賛成か反対かではなく、選んだ席、利用した時間、予想と違った点を書いてもらう。職員も、注意を求められた場所と時刻を記録する。試行は、最初の案が正しいと証明するためではない。どの条件なら複数の利用が両立し、どこで案内や配置を直す必要があるかを確かめるためである。

⑬　もちろん、集めた記録だけで全員が満足する答えが出るわけではない。少数の利用であっても、代わりの場所を見つけにくい場合がある。件数が少ないという理由だけで、その必要を消すことはできない。一方、すべての要望を同じ席で同時に満たすことも難しい。数の多さ、困り事の強さ、代わりの有無、運用の負担を分けて確かめ、何を優先したかを説明できるようにする必要がある。

⑭　複数の立場を扱う目的は、全員の意見を一つに混ぜ、違いをなくすことではない。共通する事実を土台に、それぞれの優先事項と譲れない条件を見えるようにし、案が守れることと守れないことを示すためである。図書館の静けさと会話は、どちらかが常に正しい価値ではない。場所、時間、案内、代わりの手段という条件を置き、試した結果から直せる決まりにするとき、異なる利用を一つの公共空間に置くことができる。

本文の図書館、要望、区域分けの試行は、複数の立場を整理するために設定した教材上の例です。特定の図書館の制度や出来事を報告したものではありません。

答案を組み立てる準備

第五章から、問題編には自由な答案メモだけを置きます。問いを確かめ、根拠、必要要素、関係、限定のうち、自分が書き出す必要があるものを選びます。

一 設問が求める立場と範囲を確かめる。

二 立場ごとの優先事項と、共有する事実を分ける。

三 賛成・反対の前に、相手の譲れない条件を確かめる。

四 案が成り立つ条件と、残る限界を落とさない。

五 主語、関係、限定、指定字数を点検して清書する。

設問

問一　立場の要約（70字以内）

第三段落によれば、静かな環境を求める人が、静かな区域を明確に定めるよう求めるのはなぜか。音の少なさ以外の優先事項に触れ、70字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（70字）

問二　優先事項の違い（80字以内）

第四・第五段落を踏まえ、相談できる席を求める人と職員は、それぞれ何を優先しているか。その違いを80字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（80字）

問三　共通事実と対立（90字以内）

第六・第七段落では、三つの立場が共有する事実があっても、結論が一つに決まらないと述べている。それはなぜか。共有する事実と優先事項の違いを含め、90字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（90字）

問四　譲歩と条件（100字以内）

第八〜第十一段落を踏まえ、区域分けの案は、二つの利用へどのように譲歩し、どのような条件のもとで成り立つか。100字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（100字）

問五　本文全体の結論（110字以内）

筆者は、公共空間で複数の立場を調整する決まりを、どのように作るべきだと考えているか。共通事実、優先事項、試行、限定に触れ、110字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（110字）

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落　図書館の会話をめぐる二つの要望と、「小さな声」という現在の決まりが生む予測の難しさを示す。

第三～第五段落　静かな環境を求める人、会話席を求める人、職員がそれぞれ優先するものを整理する。

第六・第七段落　三つの立場が事実を共有しても、守りたいものが違うため結論は自動的に決まらないと述べる。

第八～第十三段落　区域分けを提案し、その利点、成り立つ条件、代案、譲歩の意味、試行による検証、数だけでは決められない限界を示す。

第十四段落　違いを消さず、条件と限界を示し、結果から修正できる決まりにすることを結論とする。

問一　立場の要約（70字以内）

設問の意図　静かな区域を求める理由を、単に音が嫌だからではなく、利用環境を予測できることと集中の継続から説明する。

根拠　第三段落の「席に着いた後も同じ状態が続くと予測できること」と、あとから会話が始まる不安、注意や移動の負担。

必要要素　①席を選ぶ前に静かな状態を予測できる。②途中で会話が始まらず、集中を続けられる。③注意や移動を自分で負担しなくてよい。

組み立て方　「音を減らすだけでなく、～でき、～しなくてよい環境を求めるため」と、予測と集中を因果で結ぶ。

模範解答　席を選んだ後も静けさが続くと予測できれば、あとから会話が始まる不安や、自ら注意や移動をする負担を避け、長い文章へ集中できるから。（64字）

別解例① 座る前に静けさが続く区域だと分かれば、あとから会話が始まる不安や、注意して対立を作る負担を避け、長い文章へ集中し続けられるから。（64字）

別解例② 静かな席を偶然探すのでなく、環境を事前に選び、途中で声に考えを遮られたり、自分から注意や移動をしたりせず、読書や学習を続けたいから。（66字）

☆自己採点の観点

□ 音が少ないこと以外に、環境を予測できることを含めたか。

□ 集中を続けること、注意や移動の負担のいずれかを説明したか。

□ 静音区域を求める理由として70字以内の因果にしたか。

答案で注意したい点 「うるさいと勉強できないから」だけでは、この立場が重視する予測の可能性が示されない。

問二 優先事項の違い（80字以内）

設問の意図 二つの立場を、会話を認めるかどうかではなく、それぞれが図書館利用と運用の何を守ろうとしているかで対比する。

根拠 第四段落の「資料と対話を同じ場所で利用できること」と、第五段落の「初めて来た人にも分かり」「一貫して案内」「限られた人員」。

必要要素 ①会話席を求める人は資料と対話を同じ場所で使えることを優先する。②職員は誰にも明確で一貫し、続けられる運用を優先する。

組み立て方 「前者は～を優先するのに対し、職員は～を優先する」と、資料利用と運用の観点を分ける。

模範解答 相談席を求める人は、資料を広げて説明し合う共同の学びを同じ場所で行えることを優先し、職員は、初来館者にも明確で、限られた人員で一貫して続けられる運用を優先する。（80字）

別解例① 会話席を望む側は、資料を使って館内で共同学習できることを重んじる。一方、職員は初めての人にも明確で、担当者によらず忙しい時間にも続けられる決まりを重んじる。（78字）

別解例②　資料と対話を切り離さず、共同で学べる利用の保障が前者の優先事項であり、誰にでも分かる案内と、限られた職員で一貫して続けられる実行可能性が後者の優先事項である。（79字）

☆自己採点の観点

□　相談席を求める人と職員の両方を説明したか。

□　共同の資料利用と、明確で継続できる運用を対比したか。

□　一方を利己的または消極的と評価せず、80字以内で優先事項を示したか。

答案で注意したい点　「利用者は会話したく、職員は静かにしたい」とすると、職員が重視する案内と運用の明確さを取り違える。

問三　共通事実と対立（90字以内）

設問の意図　共有できる事実と、その事実をどう評価するかを分け、事実の一致だけでは優先順位が決まらない構造を説明する。

根拠　第六段落の、異なる利用が同時にあり、環境を予測しにくく案内が揺れるという共通事実、第七段落の三つの優先事項。

必要要素　①三つの立場は現在の決まりでは環境を予測しにくいと認める。②静かな集中、共同の学び、運用の明確さのどれを優先するかが違う。③共通事実から方法は一つに決まらない。

組み立て方　「～という事実は共有するが、～が異なるため、～は決まらない」と、共有・相違・結論を順に置く。

模範解答　三者は、現在の決まりでは席の環境や案内を予測しにくいと共有するが、集中、共同学習、運用の明確さのどれを優先するかが違うため、会話をなくすか認めるかは決まらない。（80字）

別解例①　「小さな声」という決まりでは環境も案内も揺れるという事実には同意するが、守りたいものが静けさ、資料を介した対話、続けられる運用と異なるため、同じ解決策は導けない。（81字）

別解例②　三者は、席を選ぶ前に音の状態を予想しにくい点を共通の問題と見る一方、集中、共同利用、案内の実行可能性をそれぞれ優先するので、事実だけでは会話の扱いを決められない。（81字）

☆自己採点の観点

□　共有する事実を一つ示したか。

□　三つの立場の異なる優先事項を示したか。

□　事実の一致から結論が自動的には出ない関係を、90字以内で説明したか。

答案で注意したい点　「意見が違うから決まらない」だけでは、何を共有し、どの評価が分かれるのかという議論の構造が見えない。

問四　譲歩と条件（100字以内）

設問の意図　区域分けを単なる折衷案とせず、二つの利用の譲れない条件を認め、案が働くための具体的な条件を示す。

根拠　第八段落の、静音区域と会話区域を表示して選べる案、第九段落の音、席数、案内の条件、第十一段落の譲歩の説明。

必要要素　①静かな集中と資料を介した会話の両方を利用として認める。②場所を分け、事前に選べるようにする。③音が越えない配置、必要な席数、分かる案内が条件である。

組み立て方　「～をともに認め、～する案である。ただし、～が条件となる」と、譲歩の内容と成否の条件を分ける。

模範解答　静かな集中と資料を介した会話をともに利用と認め、区域を表示して選べるようにする案である。ただし、音が境界を越えにくい配置、双方に必要な席数、初めてでも分かる案内を整えることが条件となる。（93字）

別解例①　会話を全面禁止せず共同の学びの席を置く一方、静音区域では会話を制限して集中を守るという譲歩である。成り立つには、音を分けられる配置と適切な席数、利用者と職員が迷わない表示が必要になる。（92字）

別解例②　静けさを求める人と対話しながら資料を使う人の必要をともに認め、場所を分けて予測可能にする。ただし、区域間の音、利用に見合う席数、案内の明確さを試し、条件を満たすよう直せなければならない。（93字）

☆自己採点の観点

□　二つの利用をともに正当なものとして認めたか。

□　区域を分け、利用者が事前に選べることを示したか。

□　配置、席数、案内のうち二つ以上を、案が成り立つ条件として100字以内に含めたか。

答案で注意したい点　「区域を半分ずつにする」と書くだけでは、譲歩の対象も、音や需要に応じた席数という条件も示されない。

問五　本文全体の結論（110字以内）

設問の意図　複数立場を調整する手順を、事実の共有、優先事項の把握、条件つきの案、試行と修正、残る限界まで統合する。

根拠　第六・第七段落の共通事実と優先事項、第十一段落の譲歩、第十二・第十三段落の試行と記録、第十四段落の条件と限界。

必要要素　①共通事実と各立場の譲れない条件を分ける。②条件を示した案を試す。③結果を複数の観点で確かめて修正する。④全要望を同時に満たせない限界と優先理由を説明する。

組み立て方　「まず～。次に～。ただし～ため、～を説明する」と、合意、設計、検証、限定の順に置く。

模範解答　共通事実と各立場の優先事項を分け、場所や時間など条件を示す案を試す。利用状況と運用負担から修正し、全要望を同時に満たせない限界を踏まえ、何を優先し、どんな代替を用意したか説明できる決まりにする。（97字）

別解例①　共通する困り事と、集中、共同利用、運用という優先事項を整理し、成り立つ条件を示した案を期間限定で試す。件数だけでなく困り事の強さや代替の有無も確かめ、守れない点と選んだ優先理由を示して直すべきだ。（98字）

別解例②　共有事実を土台に各立場の譲れない条件を認めた案を作り、場所や時間を限定して試す。予想と違った点や職員の運用負担から修正し、全員を同時に満足させられない限界と、選んだ優先事項や代替手段を示すべきだ。（98字）

☆自己採点の観点

□　共通事実と、各立場の優先事項・譲れない条件を区別したか。

□　条件つきの案を試し、結果から修正する流れを含めたか。

□　全要望を同時に満たせない限定と、優先理由を説明する必要を110字以内で示したか。

答案で注意したい点　「全員が納得するまで話し合う」とまとめるだけでは、共通事実、条件、試行、残る限界を扱う本文の手順にならない。

第五章の学び　複数の立場をまとめる答案では、共有する事実と異なる優先事項を分け、案への譲歩と成り立つ条件を示す。

第六章　わからない部分を残す

この章で身につける力　離れた根拠を自分で選び、わかっていることと未確認のこと、境界と関心、判断と保留を関係づけて80〜120字の答案へ統合する。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

①　資料室で古いカードを整理していたとき、端が水でにじんだ一枚を見つけた。「十月、橋の下で、白い箱を――」と読めるが、その先は消えている。裏面には日付らしい数字と、別の筆跡で丸印がある。橋の下で何を見つけたのか、白い箱をどうしたのか。わずかな言葉が残っているため、かえって続きを想像したくなる。

②　私たちは、欠けた部分をそのままにしておくことを落ち着かなく感じる。前後がつながる物語を作れば、カード全体を理解した気になれるからだ。しかし、「白い箱を拾った」と補っても、「置いた」「探した」「運ばなかった」かもしれない。書かれていない続きを一つに決めると、分からなかった部分が消えるのではなく、自分の想像で覆われる。

③　そこでカードの記録には、三つを分けて書くことにした。実際に読める語句、紙の状態から確認できること、そして判読できない部分である。日付のように見える数字も、日付だと断定せず、「数字あり」と記した。この作業は、何も分からないと投げ出すことではない。分かっている範囲を狭く正確に示し、あとから別の資料と比べられる形にすることである。

④　「わからない部分を残す」とは、理解をやめることではない。今の根拠で言えることと、まだ言えないことの境界を示す態度である。境界が見えれば、次に何を探すかも分かる。同じ番号のカード、橋が描かれた地図、その時期の整理記録が見つかれば、読みを更新できるかもしれない。逆に境界を消してしまえば、想像した内容を新しい根拠と取り違える危険がある。

⑤　この態度は、人の言葉を聞くときにも必要になる。共同作業の相談で、ある人が「今回は参加しない」とだけ伝えたとする。予定が合わないのか、作業の内容を変えたいのか、詳しく話したくない事情があるのかは、その一文からは決められない。すぐに「関心がないのだ」と結論すれば、相手の言葉に、自分に都合のよい理由を付け足すことになる。

⑥　だからといって、何も尋ねず、担当表から名前を消せばよいわけでもない。締切や引き継ぎに必要な範囲で、「別の日なら参加できるか」「担当を外してよいか」と選べる形で確かめることはできる。相手が「理由は話したくない」と答えたなら、その境界を越えて説明を求めず、担当の変更だけを確認する。関心を向けることと、相手の内側へ立ち入ることは同じではない。

⑦　ここでいう境界は、関係を切る線ではない。何を共有するかを本人が決められる範囲であり、こちらが判断に必要な事柄を区別するための線でもある。理由をすべて知らなくても、作業の分担は調整できる。反対に、親しさがあるからといって、説明を求め続けてよいことにはならない。分からなさを残したままでも、具体的な約束については確かめられる。

⑧　ただし、分からない部分をいつでも保留してよいとは限らない。理科準備室で薬品の容器を見つけ、表示の一部が読めないとき、「たぶん以前と同じものだ」と推測して使うことはできない。中身と扱い方を確認できるまで使用を止め、担当者や正式な記録を確かめる必要がある。安全に関わる判断では、分からなさは静かに眺める余白ではなく、行動を止めて確認する理由になる。

⑨　古いカードと薬品の表示は、扱う対象も急ぎ方も異なる。カードは、未確認と記して保存すれば、別の資料を待ちながら調査を続けられる。薬品は、確認できないまま扱えば影響が生じるため、先に使用を止めなければならない。それでも共通する原則がある。根拠のない想像で空所を埋めず、分からない範囲を明示し、その不確かさが次の行動にどう関わるかを判断することである。

⑩　私たちはしばしば、「理解した」と「説明できる」を同じもののように扱う。説明を一つ作れば、対象をつかんだ気になれる。しかし、説明は対象のすべてではない。カードの一文には、書き手、目的、その後の出来事など、今は確認できない部分が残る。人の短い返

事にも、本人が共有しない理由が残り得る。説明できない部分があることを示す方が、対象を単純な型へ押し込めない場合がある。

⑪　一方で、「人は完全には分からない」という言葉を、確かめる努力をしない理由にしてはならない。話を聞き違えた可能性があれば尋ね直せるし、資料が不足していれば探せる。分からなさを尊重することは、最初の印象を放置することではない。問いを小さくし、答えられる範囲を確かめ、得た根拠に応じて以前の理解を修正する。その繰り返しによって、境界の位置も変わり得る。

⑫　また、距離を置くことが必要な関係もある。相手の言動によって安全や尊厳が損なわれるなら、理解を深める前に、接触を減らしたり支援を求めたりしてよい。分からないまま関心を向けることは、同意することでも、我慢して関係を続けることでもない。相手を一つの説明に閉じ込めないことと、自分を守る境界を定めることは両立する。

⑬　離れた例を並べてみると、「残す」という言葉の働きが見えてくる。古いカードでは、空所を未確認として残すことで、資料としての正確さを守る。共同作業では、相手が話さない理由を残すことで、本人が決める範囲を守りながら、必要な約束を確認する。安全に関わる表示では、分からなさを残したまま使わず、確認できる人と記録へつなぐ。残すことは停止ではなく、次の行動の形を選ぶことである。

⑭　理解には、分かった内容を増やす働きと同時に、どこから先はまだ分からないかを示す働きが必要である。未確認の部分を想像で埋めず、必要なら問い直し、判断や安全に関わるときは確認できるまで行動を変える。他者については、共有するかどうかの境界を尊重しながら、必要な事柄へ関心を向ける。そして新しい根拠が得られたら、以前の説明を直す。わからない部分を残すことは、理解の反対ではなく、理解を閉じないための方法なのである。

本文の資料カード、共同作業、理科準備室は、理解の境界と判断の条件を考えるために設定した教材上の例です。実在の出来事を報告したものではありません。薬品の表示を確認できない場合は使用せず、学校・施設の安全手順と担当者の指示に従うという原則だけを扱っています。

答案を組み立てる準備

第六章では、問題編の手がかりを自由な答案メモだけにします。必要な根拠の位置や要素数を自分で判断し、これまでの六つの工程から使うものを選びます。

一　何を、どの関係で答えるかを確かめる。

二　近い箇所だけで足りるか、離れた根拠が必要かを判断する。

三　必要要素を分け、因果・対比・条件・限定の関係を定める。

四　本文で確認できる範囲を越えていないか点検する。

五　指定字数に合わせて組み立て、主語と述語を直す。

設問

問一　想像と確認（80字以内）

第二〜第四段落によれば、水でにじんだカードの続きを一つに決めて補うことには、どのような危険があるか。また、筆者は代わりにどう記録すべきだと考えているか。80字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（80字）

問二　境界と関心（90字以内）

第五〜第七段落を踏まえ、共同作業で「わからない部分を残す」ことは、相手へ無関心でいることとどのように異なるか。90字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（90字）

問三　離れた例の共通原則（100字以内）

古いカードの例と、薬品の表示の例には、扱い方の違いがある一方、共通する原則がある。第四・第八・第九段落を踏まえ、違いと共通点を100字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（100字）

問四　理解と距離（110字以内）

第十〜第十二段落を踏まえ、相手を一つの説明に閉じ込めず関心を向けることと、自分を守るために距離を置くことは、なぜ両立するのか。110字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（110字）

問五　本文全体の統合（120字以内）

筆者のいう「わからない部分を残す」とは、どのような理解の方法か。根拠と想像の境界、必要な確認や行動、他者への関心、新しい根拠による修正に触れ、120字以内で説明せよ。

答案メモ（自由）

解答欄（120字）

解答・解説

本文の流れ

第一〜第四段落　欠けた資料を想像で補う危険を示し、確認できることと未確認のことの境界を記録する方法を述べる。

第五〜第七段落　人の短い言葉を一つの理由へ決めつけず、共有の境界を越えずに必要な約束を確かめることを示す。

第八・第九段落　安全に関わる不明点では使用を止める例を加え、対象ごとの行動の違いと共通原則を整理する。

第十〜第十二段落　説明できることと理解を区別し、確かめる努力、自分を守る距離、相手を単純化しない関心が両立すると述べる。

第十三・第十四段落　三つの例を統合し、境界を示し、条件に応じて行動し、新しい根拠から修正する開かれた理解を結論とする。

問一　想像と確認（80字以内）

設問の意図　資料の空所を想像で補う危険と、確認できる範囲を残す記録方法を、問題と代案の関係で説明する。

根拠　第二段落の「自分の想像で覆われる」、第三段落の、読める語句、確認できる紙の状態、判読できない部分を分けること、第四段落の境界。

必要要素　①一つの続きを補うと想像を事実と取り違える。②確認できる内容と未確認の部分を分ける。③あとで根拠と比べ、更新できる形にする。

組み立て方　「〜すると〜危険があるため、代わりに〜し、〜できるようにする」と、危険・方法・働きを順に置く。

模範解答　続きを補うと想像を事実と取り違える危険があるため、読める語句と紙から確認できること、判読不能な部分を分けて記録し、後の資料で更新できるようにする。（73字）

別解例① 欠けた続きを一つに埋めると、推測が元の記録を覆うため、実際に読める内容と未確認の範囲を区別して示し、別の資料が見つかったときに比べられる形で残す。（73字）

別解例② 白い箱をどうしたか決めつけると、想像を根拠として扱うおそれがあるので、読める語句と紙の状態だけを記し、読めない箇所は未確認と示して修正の余地を残す。（74字）

☆自己採点の観点

□ 想像を事実または根拠と取り違える危険を示したか。

□ 確認できることと、判読できない部分を分けて記録すると書いたか。

□ 新しい資料によって更新できる働きまで、80字以内で説明したか。

答案で注意したい点 「分からないから書かない」では、筆者が読める範囲を正確に記録し、調査を続ける方法を説明できない。

問二　境界と関心（90字以内）

設問の意図 相手が共有しない理由を残すことと、共同作業に必要な確認をすることを両立させ、無関心との違いを説明する。

根拠 第五段落の、参加しない理由は一文から決められないこと、第六段落の、選べる形で確かめ、理由を話したくない境界を越えないこと、第七段落の分担調整。

必要要素 ①参加しない理由を決めつけない。②話したくない理由の説明を求め続けない。③締切や担当など共同作業に必要な範囲は選択肢を示して確認し、調整する。

組み立て方 「理由は～せず、境界を尊重する一方、～は確かめて～する」と、保留と具体的な関わりを対比する。

模範解答 参加しない理由を決めつけず、話したくない範囲へ説明を求めない一方、別日なら可能か、担当を外すかなど、締切と分担に必要なことは選べる形で確かめて調整する点が異なる。（81字）

別解例① 相手が共有しない理由は未確認のまま尊重するが、共同作業を放置せず、参加日や担当の変更について答えを選べる問い方で確認するため、関心を失って関係を切る態度ではない。（81字）

別解例②　短い返事から相手の内面を推測せず、理由を話さない境界を越えない。ただし、作業に必要な予定と分担には関心を向け、相手が選べる方法で意向を尋ね、具体的な約束を整える。（81字）

☆自己採点の観点

□　参加しない理由を決めつけないことを含めたか。

□　本人が話したくない範囲を尊重すると示したか。

□　作業に必要な予定・担当は確認して調整するため、無関心とは違うと90字以内で説明したか。

答案で注意したい点　「相手の気持ちを尊重する」だけでは、何を尋ねず、何を具体的に確認するかという境界が示されない。

問三　離れた例の共通原則（100字以内）

設問の意図　離れた二例について、保留中に取る行動の違いと、根拠のない想像を避ける共通原則を一つの答案へ統合する。

根拠　第四段落の、未確認と示して別資料を探すこと、第八段落の、使用を止め正式な記録を確かめること、第九段落の共通原則。

必要要素　①カードは未確認と記して保存し、調査を続けられる。②薬品は確認まで使用を止める。③どちらも想像で補わず、不明の範囲と次の行動を定める。

組み立て方　「カードは〜だが、薬品は〜する。両者は〜という点で共通する」と、違いを先に置いて共通原則へまとめる。

模範解答　カードは未確認と記して保存し調査を続けるが、薬品は安全への影響があるため、内容と扱いを確認するまで使わない。どちらも想像で空所を埋めず、不明の範囲を示し、影響に応じて次の行動を決める点で共通する。（98字）

別解例①　カードは読めない部分を残して別の資料を待てるのに対し、薬品は不明なまま扱わず、正式な記録を確認する。急ぎ方は違っても、推測を事実にせず、何が不明かと、それに応じた行動を明確にする点は同じである。（97字）

別解例②　カードでは確認済みと未確認を分けて保存し、別の根拠で読みを更新する。表示の読めない薬品では安全のため確認まで使用を止める。行動は違うが、根拠なく補わず、不明点を次の確認へつなぐ原則は共通する。（96字）

☆自己採点の観点

□　カードは保存して調査を続け、薬品は使用を止めるという違いを示したか。

□　二つの行動が異なる理由に、安全への影響を含めたか。

□　根拠なく補わず、不明の範囲と次の行動を定める共通点を100字以内で示したか。

答案で注意したい点　「どちらも分かるまで待つ」では、カードは調査を続けられるが、薬品は先に使用を止めるという行動の違いが消える。

問四　理解と距離（110字以内）

設問の意図　他者を単純化しない理解の態度と、安全・尊厳を守る境界を別の判断として捉え、両者が矛盾しない理由を説明する。

根拠　第十段落の、説明は対象のすべてではないこと、第十一段落の、確かめて修正する努力、第十二段落の、距離を置くことと相手を一つの説明に閉じ込めないことの両立。

必要要素　①相手について確認できない理由や複雑さを残し、決めつけない。②それは相手への同意・我慢・関係継続を意味しない。③安全や尊厳のために距離を置いても、単純化せず必要な支援へつなげられる。

組み立て方　「～することは、～を意味しない。したがって～しつつ、～できる」と、理解の限定と自己保護を分けて結ぶ。

模範解答　相手を一つの理由で説明せず、確認できない複雑さを残すことは、言動への同意や、我慢して関係を続けることを意味しない。したがって、必要な事実へ関心を向けつつ、安全や尊厳が損なわれる場合は接触を減らし支援を求められるから。（108字）

別解例①　他者を単純な型に入れず、分からない部分を認めるのは、相手の要求を許可したり関係を保ったりする義務ではない。相手についての断定を避ける判断と、自分の安全を守る判断は別なので、必要な関心を保ちつつ距離や支援を選べる。（106字）

別解例②　相手の内面を分かったと決めず、尋ね直せることは確かめる態度と、危険な言動から離れる境界は別に定められる。理解できない相手に同意したり耐えたりする必要はないため、単純化を避けながら接触を減らし、自分を守ることができる。（108字）

☆自己採点の観点

□　相手を一つの理由や型へ閉じ込めないことを含めたか。

□　分からなさを残すことは、同意・我慢・関係継続を意味しないと限定したか。

□　安全や尊厳のために距離や支援を選べるので、両立すると110字以内で説明したか。

答案で注意したい点　「相手を理解するため距離を置く」とだけ書くと、単純化を避ける関心と、自分を守る境界が別の判断であることが見えない。

問五　本文全体の統合（120字以内）

設問の意図　三つの例と後半の限定を結び、分からなさを放置せず、閉じない理解の方法として全体をまとめる。

根拠　第三・第四段落の確認済みと未確認の境界、第六・第七段落の必要な確認、第八・第九段落の安全に応じた行動、第十一・第十二段落の修正と境界、第十四段落の結論。

必要要素　①根拠で言えることと想像を分ける。②不明点の影響に応じて確認・保留・停止などを選ぶ。③他者の共有範囲を尊重しつつ必要な関心を向ける。④新しい根拠で説明を修正する。

組み立て方　「～とは、～する方法である。～の場合は～し、他者には～する。さらに～」と、定義、行動条件、関心、修正の順にまとめる。

模範解答　根拠から言えることと想像を分け、未確認の範囲を示す方法である。不明点が判断や安全に関わるときは確認まで行動を止めるなど影響に応じて対応し、他者には共有の境界を尊重して事柄へ関心を向ける。新しい根拠を得たら説明を直し、理解を閉じない。（116字）

別解例①　分かった内容だけで全体を決めず、未確認の範囲を示し、想像を根拠にしない理解である。必要なら問いや資料を探し、安全に関わる場合は確認まで使用を止める。他者の話さない範囲を越えず必要な約束を確かめ、新しい根拠に合わせて説明を直し続ける。（116字）

別解例②　確認できる事実と分からない部分の境界を残し、その不確かさが行動へ与える影響に応じて、調査、確認、停止を選ぶ方法である。相手を決めつけず、共有しない範囲を守りながら必要なことへ関心を向け、さらに別の根拠が見つかれば以前の理解を更新する。（117字）

☆自己採点の観点

□　根拠から言えることと想像の境界を示したか。

□　不明点の影響に応じ、確認・保留・停止など行動を変えることを含めたか。

□　他者の共有範囲を尊重する関心と、新しい根拠による修正まで120字以内で統合したか。

答案で注意したい点　「分からないままにすることも大切だ」とまとめるだけでは、必要な確認、条件に応じた行動、他者の境界、修正という本文の方法が落ちる。

第六章の学び　自力で答案を作るときは、離れた根拠を選び、確認できる範囲、条件に応じた行動、本文の限定を一つの関係へ統合する。

全六章を終えて

この章で身につける力　完成答案だけでなく、根拠・必要要素・関係・限定を説明し、自分で書き直せるかを確かめる。

支援の変化　第一・第二章では、準備欄に沿って根拠と関係を整理しました。第三・第四章では、必要要素を自分で選びました。第五・第六章では、自由メモから六工程を自分で組み立てました。

答案の成立　答案が模範解答と同じ語順でなくても、問われた対象へ直接答え、必要要素を正しい関係でつなぎ、本文の限定と指定字数を守っていれば成立します。

次の学習　書き直すときは、全文を捨てず、不足した要素、誤った関係、広げすぎた限定のどれかを見つけます。直す場所を説明できれば、次の答案にも同じ工程を使えます。

奥付

書誌・利用について

書名　『現代文問題集 第三冊　根拠から答案を組み立てる』

役割表示　標準・記述の組み立て

版表示　2026年8月　改訂完成版

著作・編集・発行　和会塾（なごらいじゅく）

ウェブサイト　https://kokugo-senka.top/

利用について

個人での学習のための印刷、および学校・学習支援の場における非営利の授業利用を認めます。

教材データそのものの再配布、販売、ウェブサイト等への転載、および改変したものの配布はご遠慮ください。

誤植や表示上の不具合、配布・利用についてのご相談は、和会塾ホームページのお問い合わせフォームからお知らせください。

© 2026 和会塾